華鬘草～号外

折々の記

～ 岩手のことば　事始め ～

折々の記

～ 岩手のことば　事始め ～

目次

一　「ことばの相談会」開催……1
二　ことばの教室開設・教員養成運動……3
三　決　意……5
四　言語障害児教育研修……7
五　教室設置運動～盛岡市へ……9
六　手づくりの「ことばの教室」……11
七　「ことばの教室」開級……13
　　資料編・その一……14
八　はじめての退級式……15
九　「わが子がことばを得るまで」（文集・「ばっけ」より）……17
十　宮古市「ことばの相談会」……19
十一　岩手県言語障害児をもつ親の会　第一回大会……21
十二　二戸市「ことばの相談会」……23
十三　久慈市「ことばの教室」開設……25
十四　田野畑村　島越の夕食……27
十五　子どもたちのこと……29
　　資料編・その二……32

十六　教室開設運動県南・沿岸南部へ……33
十七　「岩手県言語障害教育研究会」発足……35
十八　皇太子殿下・ことばの教室ご訪問……37
十九　「言語発達評定尺度」への取り組み……39
二十　小学校「きこえの教室」開級……41
二十一　県親の会第五回大会・宮古大会……43
二十二　ことばの実態調査会……45
二十三　親の会十周年記念大会と第一回親子合宿研修会……47
二十四　ことばの教室公開研究会……51
二十五　中学校「きこえの教室」開級……53
二十六　第八回全国難聴言語障害教育研究協議会・岩手大会開催……55
二十七　セミナー（研修会）開催……59
二十八　「幼児ことばの教室」開級……61
二十九　幼児期の言語研修会……63
資料編・その三……64
三十　岩手のことばを語る会……65
三十一　最後のことばの相談会……67
あとがき

一　事始め〔ことばの相談会〕

「ことばの相談会」開催

65-7

～落合夫妻の悲願～

昭和三十九年十月、落合ハルさんは東京お茶の水の東京医科歯科大学付属病院で、次男弘君の口蓋裂の手術を受けました。病院の外では、東京オリンピックの音楽がにぎやかに流れていました。

手術は無事に成功しましたが手術の後には、ことばの発音練習が必要なのでした。当時、ことばの発音指導を受けられるところは、千葉市立院内小学校など、全国に十余カ所しかありませんでした。落合さんは伝手を頼って、仙台市立通町小学校「ことばの教室」の濱崎健治先生を訪ね、弘君の入級を懇願しました。東北に一つしかない教室でしたので入級希望者は千人も待っている状況でした。落合さんの強い熱意によって、翌四十年一月から指導を受けられるようなりました。学校の近くに部屋を借り、親子でことばの教室通いが始まりました。

教室通級の条件として濱崎先生と交わした約束は、「岩手県に『親の会』をつくること、そして『ことばの教室』の設置運動をする」ことでした。指導の成果は素晴らしく、わずか三カ月で正しい発音を習得し、その年の三月末に釜石へ帰ることができました。

そして早速濱崎先生との約束を果たすべく、夫の新作さんと親の会を作る準備をはじめました。五月の連休には、同じ口蓋裂の子どもをもつ親たちを探しました。親たちの中には、会うことを拒否する人もいたようでした。また病院の産婦人科を訪ね、口蓋裂の子をもつ親御さんの紹介をお願いしました。障害児をもつ親御さんの紹介依頼はすぐには応じてはもらえませんでした。しかし「言語障害児のためにことばの教室の開設を願っての運動です。そのために、親の会を作りたいのです」と訳を話し、徐々に分かってもらえるようになっていきました。

運動は少しずつ、ほんの少しずつ進んでいきました。盛岡まで足を運び岩手医大、県立中央病院等を訪ねました。そして五月中頃に、やっとのことで釜石の熊谷さん、横井さん、小林さんの三人の理解者を得ること

ができました。先ずしなければならないことは濱崎先生との約束の「ことばの相談会」を行う事でした。

一方落合ハルさんは、弘君の姉の担任、甲子小学校の白川寛太郎先生に相談しました。そしてＰＴＡ総会で「ことばの相談会」への協力を訴えることにしました。総会が終わろうとした時、意を決して手を上げましたがハルさんは想いの半分も話せず、頭が真っ白になったそうです。その時白川先生が助け船を出し、訴えは皆に理解され、ＰＴＡ会長さんが全面協力を約束してくれました。早速、市のＰＴＡ連合会へ「ことばの相談会」の開催について働きかけてくれました。また、弘君の幼稚園の野田武義園長先生は市会議員でもありましたので、園長先生へも協力をお願いしました。協力、支援の輪は少しずつ広がっていきました。

こうして昭和四十年七月二十五日、釜石市教育委員会、福祉協議会、福祉事務所の三者がそれぞれ一万円の協力金を出し、岩手県で初めての**「ことばの不自由な子の相談会」**が開かれました。仙台の教室から濱崎、山村の両先生をお迎えした相談会には、六十名を超える親子が参加し、今まで不安と心配を抱えていた親子がこんなにもいたということでした。

相談会に集まった親たちで、その日のうちに**「岩手県言語障害児をもつ親の会」**が結成されました。濱崎先生との約束は果たされました。この日は会の結成だけで終わってしまいましたが、八月八日に第一回の総会を開きました。総会への参加者はわずか十二名だったとのことです。それでも、これまで一人で悩んでいた親たちにとっては十二分な仲間でした。

昭和四十年十二月発行、会報第一号によると、会長に落合新作氏、副会長に小林円蔵、熊谷安三氏、会計に横江又彦氏、監査は安細徳治、成田廣邦氏です。（事務局長は置かれなく、後に運動の中心となる成田事務局長は四十一年に入って誕生したと推察されます）

いよいよ「ことばの教室設置運動」へのスタートが切られたのでした。

運動の灯は高く燃え挙がっていきました。

（当時小学校の担任だった私は、ことばに障がいがあるＫ君の発音が気になって相談会に参加し、濱崎先生の指導テープを聞いて感動しました。その縁でことばの教室担任への道を歩むことになりました。二十八歳でした。）

二　事始め〔開設運動開始〕

ことばの教室開設と教員養成運動

65-7

～手弁当・旅費も自腹で～

昭和四十年七月、親の会を結成して直ぐに「ことばの教室」開設運動が始まった。

先ずは、釜石市に「ことばの教室開設」を働きかけた。釜石市教育委員会は、それまでも親たちの訴えを聞き「ことばの相談会」も共に開催した。市教委は親たちの願いに応えるべく翌年にも「ことばの教室」を開設したい考えであったが、教員養成は県教育委員会の管轄である。市教委は担当教員養成を県教育委員会へ働きかけたが県の反応は鈍かった。特殊学級としての「ことばの教室」の存在が県ではよく知られていなかった。（県教委指導課の中で「ことばの教室」の名前を知っていたのはひとりだけだったとか…）

当時、特殊学級と言えば「知的障害児学級」を指し県内ほとんどの市町村に既に開設されていた。そして、四十年当時全国で「ことばの教室」が開設されていたのは、千葉、神奈川、東京などに十数教室のみで、東北では仙台市に一つあるだけであった。知名度が低かったのもやむを得なかったと推察される。

岩手県への陳情

結成したばかりの親の会は、県教育委員会や県知事、県議会へ直接訴える必要があると考え「ことばの教室設置」について県への陳情を繰り返した。初めての陳情は、四十年九月三十日であった。栗沢、川端、菊池県会議員の紹介で、落合会長、小林、熊谷副会長、成田廣邦、落合ハルさん等は、知事、教育長、県議会議長、教育民生委員長に会っている。ある時は、仙台のことばの教室で勉強した落合弘君を同道し、知事に弘君のことばを直接聞いていただいた。六歳の弘君は千田知事の膝に乗ってくつろいでいたという。

釜石から盛岡へは、花巻経由が一般的であったが、盛岡に早い時刻に着く列車は、朝五時三十分発、宮古経由盛岡行きで、三時間半かけ九時に盛岡に着いた。この「釜石五時三十分発・宮古回り盛岡行き」が、県関係陳情の定番列車となった。落合さん、成田さんたちは、朝ごはんと昼ごはんのおにぎり、お茶を用意し、

旅費も自己負担で陳情を始めた。

こうして盛岡まで繰り返し足を運んだものの四十年度は大きな成果はなく、四十一年度教員養成費およそ五十万円は釜石市が負担することとなった。釜石市議会でこの研修費について質問を受けた大島直教育長は「五十万円でことばの不自由な子どもが普通の子と同じように話せるようになるならば決して高いものではないと思う」と答弁したと言う。

このような経緯で私が、東北大学と仙台市立通町小学校ことばの教室へ一年間の研修に派遣された。この四十一年度は文部省が「特殊教育内地留学制度」を開始した年であり、東北大学の他お茶の水女子大学でも言語障害児教育の一年研修が正式に始められた。

親の会では、四十一年も継続しことばの教室の開設要望と県費での担当教員養成を県教委に働きかけた。しかし、四十二年度研修に派遣された久保四男先生の派遣費用も釜石市の負担であった。

岩手県議会での論議

昭和四十二年度に入り県親の会ではこの現状を県議会で訴える必要を考え、横田チエ県議会議員のお力を借りることにした。

一方、県教育委員会高橋甲子指導主事もこの問題について頭を痛めていた。岩手県を除く東北各県の研修派遣は県費負担でなされている実態があったから、派遣費の地元負担については内心忸怩たる思いであった。高橋指導主事は、横田議員の質問、親の会の運動についても深く理解なされていた。私は親の会成田事務局長から、横田議員の質問の骨子についての相談を受け、高橋先生にも相談に乗っていただき質問の方向性について示唆を頂いた。一方高橋先生からも県としての答弁についてのお話を受け、この教育のこれからの方向性を共に考えた。このような経緯で本県言語障害児教育・ことばの教室開設の今後の方向性、研修費について議会で取り上げられ、研修費県費負担、ことばの教室開設の方向性について一定の成果が得られた。

昭和四十三年度からは、研修派遣費が県費負担となる一方、ことばの教室の設置についても親の会と県教委で、内陸部、沿岸部各四か所を重点開設地とする方向が確認できた。ここから教室開設運動は大きく前進した。

三　〔ことばの相談会・その2〕

68-3

決　意

～相談会参加と内地留学～

昭和四十年七月、夏休みを一ケ月後にひかえ、期末テストや一学期の評価に追われていた私の目に、職員室に貼られた一枚のポスターが目に入った。初任校、釜石市立八雲小学校の五年生を担任していた夏のことだった。

ポスターには「**ことばの不自由な子どもの相談会**」と書かれていた。その時とっさにK君のことが頭に浮かんだ。あの子のことばがなんとかなるのかな？と。体育が得意で飛び箱、鉄棒などの時は模範演技をしていた。彼の技術はすばらしかったが、その解説「逆上がりのときは、手をこう…足の先を…」の説明はクラスの子どもたちに半分も分からなかった。まして、四月から接した私にはほとんど理解できなかった。

七月二十五日、夏休み一日日は職員で海へ行き一学期の慰労会をするのが慣例であったが、その日私は「ことばの相談会」に出ることにした。

仙台から来た二人の先生が子どもたちの検査をしていた。途中で言語障害児について、父母を対象にスライドを使ってのお話しがあった。印象的だったのは、テープレコーダーから流れて来る子どもの声だった。それはまさしくK君のあの声と同じものだった。それが指導により普通の子どもと同じように、いやそれ以上に流暢に話す声が流れてきた。すごい感動であった。こんな教育があったのか。教員になって七年、知らなかった教育。別の教育の世界があった…。

新任から七年。「先生とはこんなものかな」とマンネリ化しつつある私の中に、突然何かが飛びこんで来た。先生に二、三質問したように記憶しているが、何を質問したのかはよく覚えていない。多分「ことばの不自由な子が本当に直るのか、医師でもない教師にそれが可能なのか…教育で可能なことか」と、そんな素朴なことだったと思う。初老の白髪の先生は、にこやかに「仙台に来て実際の指導を見ること」を勧められ話しは終わった。

その夏休み所用で一関市に出かけたついでに、仙台

の「ことばの教室」を訪ねることにした。相談会で目の当たりにした「あの教育」の現場を見たい、確かめたいという気持であった。

事前に連絡もしないまま通町小学校を訪ねた。浜崎健治、山村衛の両先生は相談室兼指導室で私の拙い質問にゆったりと、丁寧に「ことばの教室」のことを話し、指導場面も見せていただいた。私の質問の第一声は「本当に、直りますか?」だったと、翌年研修に行ってから浜崎先生に聞かされ冷や汗をかいたものだった。とにかくK君のことばが皆と同じようになるんだ。それは確かだ。なんとかしたい。なんとかしてやりたいと思った。そしてそれは…「誰かがやってくれること」だと思っていた。

翌四十一年一月末頃だった。安久津成雄校長に校長室に呼ばれた。「大島直教育長さんが、君に言語障害児の教育を勉強しに行ってみないか」と言っているとのことだった。言語障害とは何のことか一瞬とまどったほど、夏休みの「ことばの不自由を子の相談会」のことは忘れていた。

県で初めての教育、だれもやったことのない教育、体感したあのすごい教育効果は大きな魅力であつた。そして、K君のことばを直せるかも知れないという願いも…そして不安も。一年後に果たして子どものためになる先生になれるのか。全くの未知の分野であれば新しいものをつくる喜びもあるが、行き詰まっても誰に相談することもできない。「特殊教育」という分野に入って、将来果たしてやり通せるだろうか。いつまで「ことばの教育」をやり続けなければならないだのだろうか…と。

その後、大島教育長から直接ご連絡をいただき、自宅を訪問して相談する機会をいただいた。「研修を受けたら何時までこの教育に関わるのか、研修に伴う義務は…」等、素朴な疑問を直接お聞きした。

三月に入り、決意を固めた。新しい教育を！

新日鉄松倉社宅の落合新作さん（親の会会長）宅を訪ねたのは決意を固めて間もなくであった。

親の会の方々とはじめて顔を合わせ、期待と激励をいただき、親たちの「この教育」への切実な想いを直に感じ、決意を一層強いものとした。

四　事始め〔言語障害児教育研修〕

言語障害児教育研修

66-4

～東北大・通町小学校～

昭和四十一年四月、この年から文部省は「特殊教育担当教員内地留学制度」を開始した。これを受け、お茶の水女子大学では「言語障害児教育担当教員研修」を正式に開始した。そして、東北大学でも同じく担当教員研修を教育学部「聴覚・言語欠陥学教室（主任・佐藤昭一助教授）」でスタートさせた。この東北大学での研修は、仙台市立通町小学校ことばの教室主任濱崎健治先生や東北ブロック言語障害児をもつ親の会の強い働きかけによって実現したものであった。なお、この年から本県教育委員会指導課に「特殊教育担当指導主事」（高橋甲子先生）が初めて置かれた。ある意味で特殊教育元年というべき年でもあった。

東北大学には青森県一名、秋田県二名、そして岩手県からは私が派遣された。研修は、東北大学での障害児全般の理論研修と通町小学校での実習研修と大きく二つに分かれていた。大学は火～金曜日、通町小は月～土曜日の大学の空き時間が充てられた。

大学では、障害児教育全般に関する各種講座があり、その中から自由に選択し年度末に正式な単位認定を行うとのことであった。学部の講義を聴講する形で、心身欠陥学、聴覚病理学、視覚病理学、音声学、教育統計学、心理学実験など、時には医学部に出かけ「視覚解剖学」見学など幅広い研修が用意され学部学生に交じっての受講であった。研究室では、佐藤助教授の「言語障害児教育概論」はじめ言語障害児関係の講義と演習があった。演習では、市内の幼稚園、家庭を訪問しての言語障害児の実態調査などもあった。留学生の研究室も付属小学校内に用意された。

ことばの教室での実習は、月、土曜日が主で、あとは大学の講義後となった。文部省の研修派遣先が「東北大学教育学部」であり、大学での研修が優先されるのは致し方のないことでもあった。しかし、翌年から「ことばの教室」を開き、実際に指導するという使命を受けている者としては大学での統計学、視覚概論や医学部での解剖見学などよりは「ことばの教室」での

実習をより多くしなければとの思いが強かった。

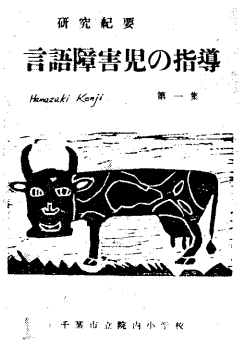
前期はそのまま大学に在籍しながら、通町小学校での実習を続けたが、やはり翌年からの教室開設に備え、教室実習をより多くと考えた。そして「後期からは通町小学校での実習に専念したい」旨を県教委高橋甲子指導主事に相談をし、その方向で了承を頂き後期は実習に専念できた。今になると大学での幅の広い研修を途中で放棄したのはもったいないとも思えるが、翌年の教室開設には、よりベターなことだったと考える。

後期からのことばの教室での実習は、濱崎先生の下、発音異常、口蓋裂、吃音、マヒなどの児童八名を担当し幅広く実習ができた。この徹底した実習は、翌年ことばの教室を開いてからの指導に大いに役立った。開級から半年で二人の退級生を出せたのも、この徹底した実習があったればこそと考える。また、東北各地の教室開設予定校での全校言語検査は、「確かな耳(弁別力)」を育てる貴重な機会となった。

後期の実習中には、濱崎先生に同道し多くの研修会に参加することが出来た。文部省の研究発表会では、濱崎、大熊喜代松（千葉院内小学校）両大御所先生の発表を同時に拝聴する機会にも恵まれた。

国内先進地、上丸子小（川崎市）、西町小（東京台東区）、市川市等など各校の参観もさせていただいた。

当時は、通町小学校と千葉院内小学校の指導法は大きく異なると言われていた。通町小は、鏡に向かっての構音指導を主体とする指導であり、院内小は鏡など使わず聞き分け・弁別指導一本であると言われていた。これに興味を持って、院内小学校を二度ほど訪問した。仙台の実習生ということで、大熊先生からは海老天丼で大歓迎された。結論は、院内小にも指導用の鏡はあり、機能訓練用ピンポン吹き台もあった。耳の訓練・弁別指導だけで直せる場合もあるし、鏡に向かって舌遣いを指導することもあるということであった。



昭36・6　院内小研究紀要

両先生はそれなりに交流もあったようで、過日濱崎先生の遺品を整理していたら「院内小学校・第一回研究会研究紀要」が出てきた。表紙には、「K・Hamazaki」とあった。

五　事始め〔市への設置運動〕

教室設置運動～盛岡市へ

～五分間の面会から～

66-4

昭和四十一年七月十二日（金）、県親の会成田廣邦事務局長と盛岡の伊藤茂吉さん等と仙台で研修中の私も参加し、盛岡市教育委員会へ「ことばの教室」開設のお願いに出向いた。県庁に集合し、夏の太陽が照りつける道を言葉少なに盛岡市役所へ向かった。

事前の面会依頼には、急なことには応じかねるとのことであったが「釜石から出かけて来たので、ほんの短い時間でも会って頂けるとありがたい」と再度のお願いに面会して頂けることになった。

成田事務局長の勤務（国鉄・釜石機関区）の合間を縫っての急なお願いである。私も前日に急に同道を依頼されたものの大学の講義、通町小学校での実習などをやり繰りしての参加であった。役割は「ことばの教室」について説明すること「ことばの教室」の指導成果をテープレコーダーでお聞き頂くことであった。

十二時少し前、名刺交換もそこそこに、成田事務局長が「釜石市には、来年度からことばの教室が開設されます。盛岡市にもことばの悩みをもつ多くの子どもたちがいると思います。是非ことばの教室をつくっていただきたい」と訪問の趣旨を話した。課長さんは「盛岡には現在多くの特殊学級があり、障害児教育は十分にいきわたっている、問題はない」との見解であった。

そこで、既存の特殊学級と「ことばの教室」について話し、実際の子どもの指導録音テープを聞いて頂きたいとお願いした。「短い時間なら…」との課長さんの了解を得て、テープをお聞き頂けることとなった。指導前と指導後のことばの様子を録音したテープを回した。

わずか数分のテープであったが、指導前の不明瞭な発音が指導後には全く違う発音で流れた。明瞭な、そして流暢な発音が流れ、最後の早口ことばまで…。課長さんの顔が変わった。何人か残って弁当を遣いながらそれとなく聞いていた職員の方々の顔も…。「うーん…」と感嘆の声が聞こえたようだった。

面会の雰囲気は一気に変わった。私も、言語障害教

育のなんたるかを、学んだばかりの知識を総動員し説明をした。既に時間は三十分も経過している。職員のなかには、席を立って傍に来て聞く人も。大成功！

課長さんは「釜石では、来年できるんですね。盛岡も考えましょう」と言ってくれた。

その後、県親の会落合新作さん、副会長熊谷安三さん、盛岡の伊藤茂吉さん、それに東京で研修中であった県立養護学校門脇次郎先生も教育委員会へ足を運んだ。成田事務局長も国鉄勤務の合間に、盛岡まで出向き、「ことばの相談会」開催と「ことば教室」開設のお願いを繰り返した。

その年の十月二十一日(金)、県親の会と盛岡市教育委員会の共催で盛岡市「ことばの相談会」が、盛岡市立仁王小学校を会場に開催することができた。相談会には、仙台のことばの教室濱崎先生や通町小学校で研修中であった東北各地の先生方の応援も得て行われた。会には、六十七名もの相談者が訪れた。反響の大きさに盛岡市教育委員会の方々も驚いた。

この相談会に集まった有志が、同年十一月十三日(日)「岩手県言語障害児をもつ親の会盛岡支部」を結成し、支部長に伊藤茂吉さん、事務局長に佐々木巌さんが就任し、県親の会と共に盛岡市への「ことばの教室」開設運動を展開した。

盛岡市は研修派遣費用のことなどから、翌四十二年度の研修派遣は出来なかったが、研修派遣費の県負担が可能となった翌々年、四十三年度に二名の先生を研修に派遣した。派遣先は、東京学芸大学と仙台市立通町小学校であった。

昭和四十四年四月、盛岡市立桜城小学校に「ことばの教室」二学級が開設された。担当者は、清水端誠、田﨑豊義の両先生であった。

ことばの教室が、釜石市だけに開設されていた時と違い、県都盛岡市に「ことばの教室」が開設されたことは、県下各市町村への教室設置運動に大きな影響を与え、教室設置運動は大きく前進することとなった。

言語治療教室を

親の会、県教委に陳情

県言語障害児を持つ親の会＝釜石市中妻宝町＝会長落合新作氏、同副会長熊谷安三氏、県立養護学校教諭門脇次郎氏らはこのほど県教委指導課を訪れ、言語障害の子供たちのために県内の小学校に「言語治療教室」を早急に設置してくれるよう申し入れた。

落合会長らは、満足に話せなかった子供が、六カ月後にはまったく普通の子供と同様に話せるようになった実例をテープに吹き込んで持参し、実態調査をすみやかに行ない、県内の言語障害児の数を掌握するとともに「言語治療教室」を県内各地に設置してほしいと

昭41・9・3（日報）

六　〔ことばの教室開級準備〕

手づくりの「ことばの教室」

～ペンキ塗りからの出発～

67-4

昭和四十二年四月、ことばの教室の開級式を数日後に控えた日曜日。大渡小学校に菊池実校長、多田成男教頭、親の会の成田廣邦さんをはじめ数人の父母の姿があった。

ことばの教室は、校舎南側二階の普通教室二室を改築して「ことばの教室」にと用意された。そこには指導用鏡台や機能訓練に使う水道が設置され、外部からの音を遮音するため窓は二重窓だった。また発声練習の声の反響を防ぐため、三方の壁面は厚いカーテンが垂れ下がり、ことばの指導環境はほぼ完ぺきであった。廊下には父母用の椅子が用意され、教室の隣は事務室であった。しかし、廊下はもとより機能訓練室、事務室などの壁は薄く黒ずみ、廊下の腰板は赤茶けたままであった。ことばの教室で頑張ろうと訪れる子どもや親たちの心が落ち込むような空間であった。

その日、菊池校長先生はじめ親の会の方々は、この壁や廊下をきれいにしようとペンキ塗りに集まったのだった。一日だけでは終わらず、その後も校長、教頭先生は勤務の合間を見付ては、ペンキの刷毛を動かしていた。開級式の迫った四月二十三日の日曜日には、下宿の同人、菊池英二（鵜住居中）須田靖彦（白山小）藤澤秀雄（小佐野中）の先生方も駆けつけて刷毛を動かしてくれた。

廊下には、聴力検査と録音室兼用の防音室があった。釜石市は厳しい財政下での教室開設であったので、メーカー品の数十万円もする防音室を用意することができなかった。教育委員会の安斎操次長さんが休日や勤務の合間に自ら足を運び、委員会の大工さんと共に十数日かけて手作りしたものだった。多くの善意の方々の手によって、教室の形は整っていった。

【写真・教室をきれいにお掃除する父兄たち、上はペンキ塗りの菊池校長と担任の菊池先生】
義務先生は、進学生を出来るだけ受持ち、入学迎えようと自から室内にペンキを塗っ

昭42・4・24（岩手東海）

市内大町の魚屋さんは教室用の小さな茶色の掛け時計二個を贈ってくれた。また、花瓶も届けられた。素敵な絵も届いた。多くの方々の温かさによりことばの教室は出来上がっていった。

成田さん、横江さん、小西さん、落合さん夫妻など親の会の方々は、開級式が終わってからもペンキ塗りを続けられた。親の会釜石支部長、床屋の熊谷安三さんは店が休みの月曜日には決まって刷毛を持って、校門坂を上って来たものだった。

こうして、昭和四十二年四月二十五日、岩手県初の「大渡小学校ことばの教室」は開級式を迎えた。

行政、親の会、地域からの励ましと温かい支援と大きな期待を受け「ことばの教室」はスタートをした。

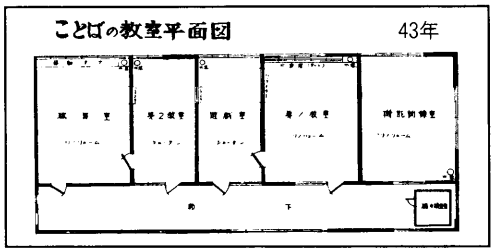
翌年には教室が一つ増設された。しかし、予算の関係で増設された教室には機能訓練に必要な水道は引かれなかった。足りないものは手づくりで…、用務員の佐々福次郎さんと共に教室の下、一階の天井裏にもぐり第二教室と事務室に水道管を敷設した。鉛の水道管を切断器で切り、ねじ込穴を刻む。「エルボ」とか「直管」とかも覚えた。管の接続面にはペンキを塗って漏水対策もした。後には専用のビニルテープが出て大変重宝したものだった。

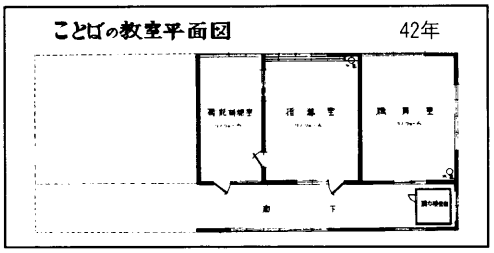
この手作りしたこの教室も、昭和五十二年春の大風によって校舎の屋根が飛ばされた。その後、鉄筋コンクリートの三階建ての立派な校舎に生まれ変わり、「幼児ことばの教室」が併設された広く立派な教室ができた。

平成十五年四月、児童数の減少等により大渡小学校は、釜石小学校と統合されることとなり「大渡小学校」の名前は消え「釜石市立釜石小学校・ことばの教室」となった。

あの手作りの「ことばの教室」に逢うことはもう出来ない。

釜石市立大渡小学校　ことばの教室　平面図





67-4

七　事始め〔ことばの教室開級式〕

「ことばの教室」開級

～釜石市立大渡小学校～

昭和四十二年四月二十五日、岩手県で初めての「ことばの教室」の開級式が釜石市立大渡小学校で行われた。入級児童七名、教室担当者は二名であった。

開級式には、釜石市大島直教育長はじめ、通級児童の在籍校校長、担任そして親の会の落合新作会長、成田廣邦事務局長など多くの来賓の方々。仙台市立通町小学校ことばの教室の濱崎健治先生もお祝いに駆けつけてくれた。テレビ、新聞など報道関係者も大勢詰めかけことばの教室への関心と期待の高さを物語っていた。

入級児童は、口蓋裂児四名、難聴児一名、構音障害児一名、口蓋麻痺児一名の七名であった。

通級回数は、口蓋裂児は週二回～五回、難聴、口蓋麻痺、構音障害児は週二回を原則とした。

教室には私の他に、藤村ヤス養護教諭が機能訓練と教室事務担当ということで特別配置となり、二名での教室運営であった。

開級式から六か月後、昭和四十二年十一月二十一日、はじめての「退級式」を迎えた。教室の指導の成果が待たれていたので、最初の年は、年度途中で、「退級式」を設け、関係者に教室の指導成果を報告する会とした。

退級生は二名、一年生のS君（構音障害）と四年生のKさん（口蓋裂）であった。

第一回「ことばを贈る」卒業式は、四十三年三月二十三日、卒業生は七名であった。

翌年四月から、仙台での研修を終えた久保四男先生が赴任、二教室、担当者三名での教室運営となった。

県下初の「ことばの教室」

釜石市大渡小に開設

言語障害のこどもたちをなおす

特殊学級（県下初の一条口小大渡小（釜石市大渡町）に設置され、二十五日開級式が行われた。特殊学級は「ことばの教室」

製の鏡を使っての発声指導方法を公開

昭42・4・25（朝日）

言語障害児をもつ〝親の会〟釜石に誕生

【写真はその親の会】

岩手県言語障害児をもつてはじめての会であり、県全親の会が八月結成されたが、市に遅れをはじめるという。いまこの言語障害児の治療機関が不足しており、県言語障害児たちの二百人もあつまって現在、約三十人があつまって現もり上りをあつて会に結成、養育機関、養育機関、養育機関

八　事始め〔ことばの教室退級式〕

はじめての退級式

67-11

～開級六か月・退級生二名～

昭和四十二年十一月二十一日、はじめて二人の退級生を出すことが出来た。Kさんは四年生で、口蓋裂に伴う発音障害があった。一年生のS君は、「カ行」の構音障害であった。四月二十五日に教室を開級し、夏休みもあったので実質指導期間は六か月であった。

教室開設運動をした親の会の方々、そしてそれに応えて開設を急いだ教育委員会関係者に一日も早く成果を報告したかった。特にも職を賭して、県内初の「ことばの教室」開設の英断をなされた大島直教育長に指導の成果を見ていただきたかった。

S君は、小学校での「ひらがな読み方調べ」の中で、担任の先生がおかしい発音（カ行関係）に気付き、学期途中の六月からの入級であった。

Kさんは、口蓋裂の手術を小学校入学一年前に、岩手医大で終えていたがことばの指導は受けられないまま四年生になっていた。

Kさんの住まいは釜石市内であったが、教室へ通うには一日掛りとなるので、家族から離れ親戚を頼ってひとり教室の近くに下宿しての通級であった。利発で、頑張り屋さんだった。親元を離れ、これまでと違った環境の中でのことばの訓練はどれ程大変だったことか。本当によく頑張ってわずか半年での退級であった。

退級式当日は、親の会の方々はもとより、テレビ、新聞等報道関係者、教育委員会、学校関係者等々大勢の方が集まり用意された退級式の教室に入りきれない程だった。

退級式の山場は、二人のことばの発表だ。S君の入級当時のことばの録音が流れた。「つ**チ**よの、たんぼで、**ト**ろろ　**ト**ろろ　**ト**ろろ　**ト**ろ**ト**ろ　な**ツ**ふえは…」。次いで本人の発表です。淀みなく、明瞭な発音で朗々と自信たっぷりに、「かえるの笛」を朗読できた。参会者の万雷の拍手が響いた。S君は、誇らしげに壇を降りた。

続いてKさんです。同じように、入級時の録音が流された。「…**ア**のつくものなあに、**ア**ア し、**ア**らす、**ア**

に、イのつくものなあに、イつね、イりん、イもの…」破裂音のカ行音の発音ができないので「か、き、く、け、こ」が、母音「ア、イ、ウ、エ、オ」になる。

本人はこのテープの、自分の発音をどんな思いで聞いていたのであろうか。いよいよKさんの発表である。私の後に続いて「かのつくものなあに、かかし、からす、かに。きのつくものなあに、きつね、きりん、きもの…」と、はっきりと自信いっぱいの発表であった。最後は早口ことば。「なまむぎ、なまごめ、なまたまご」「あおまきがみ、あかまきがみ、きまきがみ」「にかいのぼうずが、びょうぶ…」と見事にやり遂げた。

ついに直った言語障害

半年間の訓練で

菊池先生の指導実る

昭42・4・25（朝日）

参会の方々の誰もが拍手を惜しみません。フラッシュが光り、目がうるんでいる人、あちらこちらでハンカチが見えた。二人の子どもたちの嬉しそうな顔。

感動の場面であった。私も…感動した。二人ともよく頑張ったと。しかし、涙はありませんでした。あれだけ頑張ったのだから、あれだけ努力した二人を見ているので「正しく、きれいに」言えるのは当たり前だと自信をもって聴いた。

四月の開級式から半年、本当に良く頑張った。特にKさんは午前中の指導を終え、「正しい発音が出てきたよ。放課後もやろうか?」と聞くと「はい」と短く言って、授業が終わると早速ことばの教室に来て、ひとりで機能訓練のピンポン吹きをしながら私を待っていた。私も、一日も早く成果を出そうと頑張った。

教育委員会、親の会の方々、暇を見つけては教室に足を運び励ましてくれた菊池實校長、そして期待を寄せてくれる多くの市民の期待に応える為にも。

退級式のこの光景はゴールではなく、ここからがスタートだと改めて思った。

翌日の新聞各紙は「ことばの教室」の初の成果を大きく報じていた。

ここが、この発表が「岩手のことば・きこえの教室」が岩手県下に大きく広がって行く記念すべき、初の「退級式」であった。

九　〔栗沢さん母娘の手記〕

わが子がことばを得るまで

68-3

栗沢キヨ

生まれた子、キミ子は口蓋裂。私はただおろおろするのみでした。

盛岡や釜石の病院を巡りましたが、どこも「手術はまだ早い、四、五歳まで待ちなさい」とのことでした。

昭和三十九年四月、盛岡の岩手医大でようやく手術が受けられました。結果は良好とのことで、これで悩んだことから解放されるとホッとしました。

退院のとき、先生から「ことばは、まだはっきりしませんが一年もたてば大丈夫です」と言われました。まだ、はっきりしないが一年もすれば皆と同じ立派なことばで、何の心配もないと喜んで帰りました。

しかし、一年たちましたが問題は残っており、毎日がとても心配でした。明日、いや今日はなんとかと思ってみるのでした。が…ことばは直りません。学校でからかわれ、泣いて帰った事もありました。

釜石県立病院の先生に「仙台にことばを治す学校がある」ことを教えられ仙台に行きました。千葉や東京のことばの教室もたずね歩きました。しかし、どこも希望者が多く入級できず最後の望みも断ち切られました。子どもは早や三年生も終わろうとしていました。

昭和四十二年一月の市の「広報かまいし」を受け取った私は、これが本当だろうかとわが目を疑いました。「釜石にことばの教室が出来ます。入級相談会が開かれます」と。あんなに探し求めていたことばの教室が、この釜石に…。

昭和四十二年四月ことばの教室の入級式に参加できました。

大渡小学校の「ことばの教室」に通級することは、わが家からは、朝七時のバスに乗り、そして鵜住居駅で汽車に乗り換え、大渡小学校の教室に着くのは九時半、一時間の勉強を終えて家に着くのは午後三時。一日が終わります。それが一週間に三回も続くとなるとキミ子の勉強も身体も心配でした。

親戚を頼って教室の近くに下宿させることにしました。わずか九歳の子に親元を離れて、一人での生活は

大変であるとは思いましたが、キミ子はただ「こっくり」とうなずくだけでした。

それからわずか三か月。七月末、夏休みで帰ったわが子をみて家族は勿論、近所の人たちはただ驚きました。あれ程苦労して仙台、東京、千葉と訪ね歩いた月日に比べ、なんと短い三か月だったろうか。

十一月二十一日、ついに退級式の日が来ました。先生の言う、早口ことばに続いて「なまむぎ　なまごめ…」と言うキミ子を見たとき、これがあの「おぁぁんあぉぇねょーぁい」と言ったわが子だろうかと。

嫌がる子どもの手を引いて汽車に乗り、入級を断られ泣きながら戻ったキミ子だったのかと。

キミ子が生まれて九年間、片時も頭を離れなかったこの子のことば。今は皆と同じように、いやそれ以上に話すことばを得た。

このような不幸を背負って生まれてくる子どもたちの為により多くのことばの教室が誕生することを祈っています。

（文集「ばっけ」より）

ことばの教室の思い出

栗沢　キミ子

私がことばの教室を卒業して、六年が経ちました。

私は、昭和四十二年四月にことばの教室に入りました。そして、家を離れて学校の近くに一人で下宿しました。七か月のことばの練習をして、十一月に退級しました。その日は、私にとっても、家の人にとっても忘れることはできません。

ピンポン吹き、ローソク吹き、ウガイなど夕方遅くまで練習したこと。泣きながらしたこともありました。歯をくいしばって頑張りました。ことばの不自由な頃の録音を聞くのは恥ずかしいような気持ちです。

（文集「ばっけ」
S四十八年十月
釜石親の会発行）

十　〔十勝沖地震〕

宮古市「ことばの相談会」

68-5

～十勝沖地震・山田線不通～

昭和四十三年五月十六日、宮古市立愛宕小学校で宮古市教育委員会と親の会との共催で「ことばの不自由な子の相談会」を開催した。相談会までの教育委員会、会場校との打合せ等は、釜石の教室にお子さんを通わせていた宮古市の芳賀禧久先生がほとんど一人で済ませてくれた。

当日は、釜石から成田廣邦県親の会事務局長や釜石市親の会の有志が出向き、受付、案内などに当たった。相談には、釜石の「ことばの教室」久保四男、藤村ヤス先生と私が当った。

九時過ぎに始まった相談会が順調に進んでいたその時、窓ガラスがガタガタ鳴って突然の地震。愛宕小学校の校舎は、校庭より一段高い所に建っていたので、揺れも相当大きく感じた。愛宕小学校の児童、先生方は一斉に校庭に避難した。相談会のお手伝いに釜石から来ていたお母さん方の中には、自宅が海に近い方もいたので揺れが収まって直ぐ釜石に帰っていただいた。

相談会は中止にせざるを得ない状況であったが、地震が収まったこともあり、既に会場に来ておられた方々の相談を再開した。一通り相談が終わったのは午後三時近くであった。それから宮古駅に向かった。宮古～釜石間は、線路の点検で汽車が動いていないとのことで、宮古駅は多くの人でごった返していた。地震直後に釜石に向った人たちは、時間はかかったものの無事釜石に着き、自宅も津波の被害はなかったと連絡が入った。ひと安心であった。

宮古駅から列車が出発したのは午後四時過ぎ、数駅進んでは停車、また少し走っては停車。地震による被害状況の確認と列車のすれ違いの為の停車のようであった。通常は釜石駅までは一時間半位で到着するところを結局八時間以上も掛かり、釜石に着いたのは夜の十二時を回っていた。

そこから大渡小学校に向かい、車を出し藤村先生を釜石第二中学校裏の住宅に送った帰り道のこと。車内の荷物の具合が気になり道端に車を止め、後ろ向きで

荷物を直していた。突然車がドーン。気が付いたら右前輪が道路脇の側溝に落ちていた。停車した時には、確かにハンドブレーキを掛けたはずが、ブレーキが利いていなかったのだ。…三万円で買ったセドリックだった。以前勤務した学校の学区だったので、土建屋さんをしている父兄を思い出し、夜中に突然のお願いをし、工事車で牽引してもらい無事脱出。帰宅したのは、午前二時を回っていた。

そんなトラブル続きの相談会であったが、この相談会をきっかけに、芳賀禧久先生等が中心になって「岩手県言語障害児をもつ親の会宮古支部」が結成された。その後、県本部と宮古支部役員と相談会に集まった有志の方々で、宮古市の市長さんや教育長さんを訪れ「ことばの教室開設」を何度かお願いした。

相談会の翌年、昭和四十四年、若松三郎先生が仙台市に研修派遣され、昭和四十五年、岩手国体の年に宮古市立藤原小学校に「ことばの教室」が開級された。担任は、若松三郎、千葉修子先生であった。

岩手の言語障害児教育

座談会

もっと施設拡充を

釜石だけにことばの教室

親の無理解で悪化

二歳前後が手術の適期

支部設置が急務

運動の輪ひろげたい

蓄積する劣等感

許されぬ放置主義

言語障害児の分類

昭43・8・15（岩手日報）　「岩手の言語障害児教育」特集

十一　事始め〔親の会県大会〕

68-8

岩手県言語障害児をもつ親の会　第一回大会

～四支部での署名運動、募金活動～

昭和四十三年八月十八日、盛岡市大通一丁目「岩手教育会館」に於いて、初めての県親の会大会を開催することが出来た。昭和四十年に会を結成して三年目、NHK盛岡放送局が共催であった。

大会には、鈴木善幸、山中吾郎両衆議院議員、知事代理の杉山厚生部長、山本盛岡市長、横田チエ県議会議員、藤岡幸雄岩手医大歯学部長はじめ、盛岡、釜石市教育長、県教育委員会高橋甲子指導主事他教育関係者等多くの方々が激励に駆けつけていただいた。また、岩手日報社は一ページの大会特集記事を企画し、テレビ局も多くのニュースを流した。このことで「岩手県言語障害児をもつ親の会」の活動や「ことばの教室」の存在が、広く県民に知られるところとなり、その意味でも大きな成果となった。

この初めての親の会県大会を開催するに当たり、社会にどうアピールできるか、参加者はどの位になるのか、運営資金はどうするかなど種々の課題があった。

当時県親の会は釜石、盛岡、宮古、水沢の四市に支部が結成されていたが会員は百名に満たず、会費も支部の活動にも不足がちであった。まして、県大会の開催費用の捻出は極めて困難であった。このような状況ではあったが、これら四支部では「ことばの教室」開設推進の署名と県大会開催資金捻出の街頭募金、大会協賛広告依頼活動等が主体的に展開されていた。

盛岡市では県本部が主体となり、数人が一組となり大通商店街のお店を軒並み訪問した。「言語障害児」の

岩手日報　43・8・12

啓発かねて街頭進出

県言語障害児を持つ親の会

実態と「ことばの教室」の必要性を話すと、ほとんどのお店では理解をして頂けた。しかし、その話しを切り出すまで、訪問するまでが会員にとっては大きな決断が必要であった。勇気をだして話し出すと、多くの方々の理解が得られ署名をもらえた。このことが次の店を訪問する自信へとつながった。

こうして多くのお店から教室設置推進の署名と大会協力金をいただいた。ある老舗のお菓子屋さんでは、思いもよらぬ一万円の協力金をいただき、励まして頂いた。お店を訪ねて見ず知らずの人に、教室の必要性や大会の意義を話し理解してもらうことは、自分たちの活動を改めて確認することでもあった。

初めての県大会は、署名活動を積極的に行った宮古、水沢両支部。遠くからバスを仕立てて大勢が参加した釜石支部。そして、地元盛岡からは会員以外の方々の参加もあり、四百人を越える大会となり成功裏に幕を閉じた。

各地での署名運動、大会協賛募金活動を通して「ことばの教室」や「親の会活動」を多くの県民や行政関係者に広くアピールできた。県親の会にとって初めての大きな成果であった。

そして多くの人が集い、話し合い、多くの仲間がいることを確認し合えた。

この大会は、その後の親の会活動を大きく前進させる契機となった。

第１回大会

昭和43年８月13日午前10時から盛岡市岩手教育会館ホールにおいて、
第１回岩手県言語障害児をもつ親の会県大会を開催、大会参加約400名。

・主　　催　岩手県言語障害児をもつ親の会
・共　　催　ＮＨＫ盛岡放送局
・大会要項　司会・ＮＨＡ放送局　天田アナウンサー
・主な来賓　鈴木善幸、山中吾郎、山本弥之助、県厚生部長、
　　横田チエ、釜石教育長、盛岡教育長、浜崎健治
・大会内容
　第１部　・私たちの訴え　　成田妙子（釜石支部）
　　・言語障害ととりくんで　清水瑞滅（桜城小）
　第２部　研究発表と講演（映画）
　　・研究発表者　菊池義勝（釜石・大渡小）
　　・講　　演　藤岡幸雄（岩手医大教授）
　　立木　孝（　〃　）
　　名久井良作（岩大・教授）

大会開催記録

言語障害児を持つ親の会

第一回県大会（学習会）案内

このたび岩手県・県教委・その他多くの関係団体のご後援のもとに、第一回の県大会を開催することになりました。

全国に一七〇万人、岩手県下で一万二千余名といわれている言語障害児を救おうと、私たちは昭和四十一年親の会を結成して以来、関係各位の御理解、御協力をいただきながら精力的な運動を進めてまいりました。

しかしながら、運動の過程で、言語障害、ことばについての基礎的な知識と言語障害児の取扱いに関する正しい知識、正しい指導の方法などに対する学習の不足があり、それに対する要求がいかに強いかをこのたびとなりまして知ったのでありました。この強い要望に応えて第一回県大会を開催することになりました。

わが県の教育、心理、医学の権威者であられる各道府の先生方の講演は、言語障害児をかかえてなんでいられる親達の最新、またその研究を進めていられる方々、言語障害児の親たち、幼児のコトバ、全般に関心をおもちの方々にも大いに役立つものと確信いたします。

この機会に関係各位に広く御伝えの上、多数御参加下さいますようお願い申しあげます。

昭和四十三年七月

岩手県言語障害児を持つ親の会
連絡先　釜石市大渡町三丁目
釜石市立大渡小学校ことばの教室内
電話　釜石局　二九六番

・とき　昭和四十三年八月十八日（日曜日）受付午前九時、開会午前十時
・ところ　岩手県教育会館大ホール（盛岡市大通り一丁目一番十八号）
・主　催　岩手県言語障害児を持つ親の会
・共　催　ＮＨＫ盛岡放送局
・後　援　岩手県・岩手県教育委員会・岩手県社会福祉協議会・岩手県ＰＴＡ連合会
　　岩手日報社・岩手放送・岩手県特殊教育研究会

大会案内状

十二　〔設置運動～県北へ〕

二戸市「ことばの相談会」

68-8

～吃音矯正会と間違われて～

二戸市のことばの教室設置のきっかけは、娘さんを教室に通わせたいと願った嶋野清三さんであった。

昭和四十二年七月二十七日、夏休みに入ってすぐのこと、登校すると校庭の一角に見知らぬ車が止まっていた。間もなく、教頭先生に案内されて来室したのが、二戸から相談に来られた嶋野さんだった。嶋野さんは、新聞で釜石に「ことばの教室」が開設されたことを知って、子どもさん（五歳）のことばの相談に来られたのだった。

前の晩に二戸を車で発って夜通し三陸海岸を南下し、早朝に大渡小学校に着き車中で仮眠をとり待っていたようであった。この時は、教室に入ってことばの学習を続けるには、二戸から釜石はあまりに遠く入級は無理とのことになり、これからのこと等を相談して帰っていただいた。残念そうであったが「二戸にことばの教室をつくる運動をします」と前向きにお帰りになった。その後地元の教育委員会に出向き、度々ことばの教室設置を働きかけていたようであった。

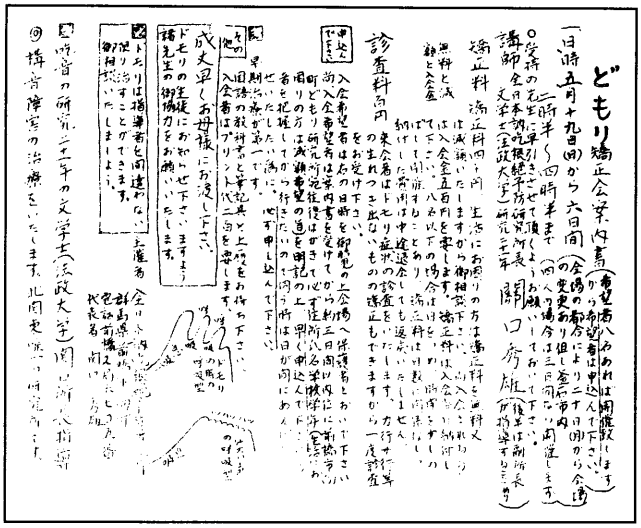
県親の会では、昭和四十三年の第一回県大会を機に各地へ教室設置運動を展開することとなり、二戸地区では嶋野さんがその中心となって動いていた。福岡町や一戸、金田一などの教育委員会を訪問し、ことばの相談会開催や「ことばの教室」の開設について一人で活動をしていた。この嶋野さんの活動を応援する意味もあって、昭和四十三年夏、成田事務局長と私は福岡町（現二戸市）教育委員会を訪問した。

応対に出た福岡町教育委員会の担当者の方は「また…ですか、先週どもりの相談会を開いたばかりです」とのことだった。

聞くと「どもりを治します」とのふれ込みで、業者の方が来たので、町内にも吃音で困っているお子さんがいるかも知れないと町の施設を貸して「どもりの相談会」を開いたばかりであるとのことであった。私たちの名刺をしげしげと眺めながら「実は…相談会に参加した方々から、お金を取られたとの話しもあり困っ

ています」とのことで、この種の相談会についてはしばらくお断りの方向である旨の話であった。

私たちは、県親の会の活動と「ことばの教室」のことを話し、教室の指導の成果としてことばの教室の退級生のテープを聴いていただいた。テープに感動した担当の方は早速上司と相談し、先の「どもりの相談会」の汚名を返上するためにも是非「ことばの相談会」を実施したいとなった。


どもり矯正会案内書

昭43・5「どもり矯正会案内書」

その年、昭和四十三年十一月二十八日、岩手県親の会主催、福岡町教育委員会共催で「ことばの相談会」が無事開催できた。二〇名位の親子が来談された。翌、四十四年二月二十四日には「岩手県言語障害児をもつ親の会福岡支部」が、会員六名で結成された。

その後、四十五年の岩手国体開催などもあって教室開設は思うように進まなかったが、国体が終わった四十六年、阿部洋三先生が言語障害児教育研修の為、宮城県教育研修センターに、大船渡市の近藤均、水沢市の鈴木秀悦両先生と共に岩手県から派遣された。

翌、四十七年七月二十二日「二戸市立石切所小学校・ことばの教室」が開設された。担任は阿部洋三、野中瑞子の両先生であった。

福岡町に教室設置が実現するまでには、嶋野さんが早朝の三陸海岸を、車を走らせ釜石のことばの教室を訪ねてから五年の歳月が流れていた。

「自分の子どもの為だけではなく、後に続く多くの子どもたちの為にも必要なのだ」という、嶋野さんの強い想いが教室を作る大きな原動力となったのであった。

（嶋野さんのお子さんは、昭和四十四年、盛岡市に開設された、桜城小学校ことばの教室に通級された。）

十三　〔設置運動～沿岸北へ〕

久慈市「ことばの教室」開設

68-10

～行政との強い連携～

久慈市には、県親の会はもとより行政関係からも、県北の拠点として「ことばの教室」開設が急がれていた。久慈市教育委員会砂子由次郎教育長が、釜石の「ことばの教室」を参観されたり、盛岡で開かれた県親の会役員会に大澤義光指導主事が訪れたりと、教育委員会として教室開設のために積極的な動きをなされていた。県親の会としても釜石市の本部から数度にわたって久慈市教育委員会を訪問し、ことばの相談会開催と教室開設を働きかけると共に親の会久慈支部の結成を強く願っていた。そして大澤指導主事も、地域の現状から早期のことばの相談会開催に積極的に関わっていただいた。

初めての相談会は昭和四十三年十一月であった。冬の日暮れは早く、成田事務局長と私が、汽車で釜石から花巻へ、そして東北本線で八戸駅へ、そこでまた八戸線に乗換えて久慈駅に降り立ったのは薄暗がりの改札口であった。ふと見ると「岩手県親の会様」の半紙を持った大澤指導主事さんが立っていた。宿までご案内いただいた。それまで何度も県内の市や町で相談会を開いていたが、指導主事さん自らが案内紙を掲げ、駅に出迎えていただいたことはなかった。感激と共にこれからの相談会、教室設置がより望ましい方向に動いていくと確信できた。

その後は、昭和四十三年十一月二十七日ことばの相談会開催。相談会に集まった親たちで翌年二月二十四日久慈支部結成、そして行政への教室開設陳情と順調に進んだ。翌年度四十四年四月には、田澤保晃先生が宮古市若松三郎、水沢市千葉忠範先生と共に仙台市での研修に岩手県から派遣された。昭和四十五年四月には、久慈市立小久慈小学校に「ことばの教室」が設置された。教室開級式は、岩手国体等の関係で翌年二月六日となったが盛大に行われた。

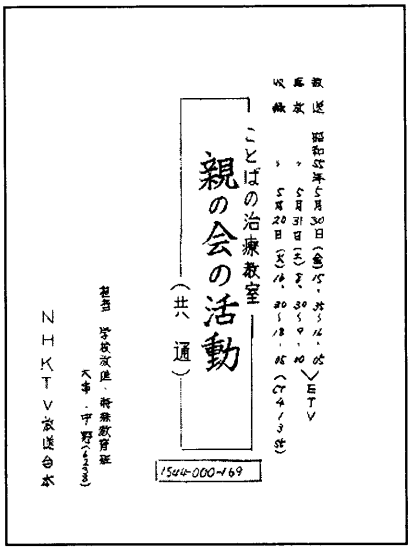
なお、四十三年十一月の相談会から、教室が開設される四十五年までの間は、少しでも子どもたちのことばの改善になればとの親の思いに応えて、久慈支部主

催、久慈市教育委員会、ＮＨＫ教育テレビの応援を得て、ＮＨＫ教育テレビで放映されていた「ことばの治療教室」の親たちのグループ視聴の試みがなされた。この取り組みは親の会の新しい活動として全国的に注目され、ＮＨＫ教育テレビ取材班（吉川プロデューサー）が久慈市を訪れて取材をしている。また、四十四年三月には、ＮＨＫ教育テレビ「ことばの治療教室（ザ行音の指導）」の中で、新しい親の会活動として取り上げられ、私がこの番組に出演し「久慈市親の会活動・テレビことばの治療教室集団視聴活動」として紹介した。

三陸熊の鼻展望台にて
ＮＨＫ吉川さんと成田・菊池

久慈市のケースは、親の会と教育委員会の両者が連携して教室開設を図り、比較的短期間でことばの教室が開設をみた理想的なものであった。

久慈市立小久慈小学校ことばの教室の初代担任は、田澤保晃、寺里星子の両先生であった。



放送　昭和45年5月30日（金）15・45～16・05 NHK-ETV
再放　〃　6月31日（土）3・30～4・10
〃　8月20日（土）16・30～17・05（カラー3分）
収録

ことばの治療教室
親の会の活動
（共　通）

1544-000-169

制作　学校放送・特殊教育班
人事・中野（4233）

NHK TV放送台本

NHK教育テレビで
岩手の親の会活動紹介

昭和44年度「第3回ことばを贈る卒業式」

十四　〔番外編〕

田野畑村　島越の夕食

68-10

～夕食は…一升瓶～

昭和四十三年晩秋。私と成田さん（親の会初代事務局長）は、国道四十五号線の宮古から十キロ程北寄りの杉林に囲まれた路上で途方にくれていた。

空冷パブリカ800は、釜石を午後三時半過ぎに発ってここまでの道を軽やかに走っていた。突然ハンドルをとられた。パンクだった。予備のタイヤをトランクから取り出して「アッ」と叫んだ。空気が抜けていた。

二週間ほど前にも、相談会開催の件で久慈に出かけた。その折のパンク修理が不完全だったようだ。当時は国道でも砂利道の部分が多く、又タイヤの質も悪かったのでよくパンクした。そのとき旅館の隣の自動車工場でしっかり修理してもらってトランクに入れたはずだったが…。

辺りは杉林、国道といっても車の往来はそれほど多くはなかった。車を道端に寄せ、成す術も無く倒木に腰をかけ通りかかる車を待つことにした。待つとなるとなかなか車は来ない。どの位待っただろうか、ようやくトラックが通りかかった。空気の抜けたタイヤと共に成田さんは車上の人に。

成田さんが宮古まで戻りパンクを修理し、しっかりと空気の入ったタイヤを積んでタクシーで戻って来るまで一時間以上はかかっただろう。暮れやすい秋の日は、杉林に囲まれていることもあって薄暗がりであった。

空冷式 パブリカ800

田老の町を過ぎて、町外れの曲がりくねって急な坂をのぼり…小本の町へ。それから、ヘッドライトの明かりを頼りに小本の急な登りカーブを慎重に、さらに田野畑の山から谷へ下り、また登るを繰り返しながら国道四十五号線をひた走った。

何時頃だっただろうか、八時はとうに回っていた。

久慈まで行くことは断念した。四十五号線を途中から右折して海岸へと下った。島越の番屋を訪ねることにした。探し当てた頃には九時をまわっていた。何とか一晩の宿泊をお願いすると、「食事はできない」とのことだった。とにかく寝るところが確保できてほっと安心。ひと風呂浴びて部屋に戻ったが…夕食はない。宿に入っての一番の楽しみは、美味しい夕食なのだが…。

成田さんが親の会の運動に出かけることが出来るのは早番勤務が終わってからであった。早番勤務の日は、朝四時には家を出て花巻まで貨物列車を牽いて行き、帰りにまた貨物を牽いて釜石に戻るのである。釜石着は三時過ぎ。そして青い機関士服のまま大渡小学校の石段を急いで上って来たものだ。

早番勤務は翌日が勤務明けになるので、その日は教室設置運動に出かけることが出来た。水沢、一関とか、久慈、福岡など釜石から遠いところは、このようにして出かけていた。私が一緒に出掛けるときは、出来るだけ金曜日の午後四時過ぎに出かけ、相手方とは土曜日に会うようにしていた。

成田さんは勤務服をことばの教室で着替え、授業の終わるのを待って私の車で出かけることが多かった。そんなとき成田さんは、夕食の楽しみにと黒い大き目のカバンの底に途中で買い込んだ一升瓶を忍ばせていたものだった。その晩も一升瓶は健在だった。それが成田さんの夕食だった。そして私の夕食は成田さんのおばあさんが作った味噌つけにぎりだった。それは、朝早く家を出て一番列車を牽いて行く息子、成田さんのために作った味噌つけにぎりの残ったものだった。…おいしかった。

その年、昭和四十三年十一月二十七日、久慈市で初めてのことばの相談会開催。そして翌四十四年、田澤保晃先生が仙台市に派遣された。

昭和四十五年四月、久慈市立小久慈小学校「ことばの教室」が開設された。

十五　〔県内各地からの通級児〕

子どもたちのこと

69-3

～釜石に居を移して通級～

ことばの教室が県内にただ一か所、釜石市にしか無かった頃は県内各地から釜石に居を移し、ことばの指導を受けた多くの子どもたちがいた。

小学校三年生で見ず知らずの人の家に世話になり、一人で一年半頑張った、湯田町左草小学校三年生のR子さん。

平泉町からお母さんと釜石に転居し、ことばの教室へ通った、平泉小学校四年生のK君。

高等学校の入学試験に合格しながら高校を一年休学して、釜石でアルバイトをし、自炊生活をしながら教室へ通った大船渡のN子さん。

銀行の就職試験の面接まで進みながらことばが不明瞭とのことで不合格となり、翌日ことばの教室を訪ねてきた福岡町のA子さん。

みんな必死に「ことば」を求めて教室に通った。県下に一つしかなかった、大渡小学校ことばの教室へ、県内各地から、多くの子どもたちが転居をして「ことば」を学んだ。

最年長は高校生のA子さんでした。冬休みが明け教室が始まったばかりの一月末、銀行の就職試験で最後の面接試験まで進んだが、その面接で不合格となったとのことであった。唇裂を伴わない口蓋裂で、外見からは異常が判らず、それ故に面接まで進んだと推察されたが、発音は口蓋裂特有の発音であった。

是非ことばを直したいと、以前新聞で見た釜石の「ことばの教室」を思い出し、申込の電話もわからず、必死に一人で教室まで来たとのことであった。

なんとかしてあげたいとの思いから親の会の人たちに事情を話し、結局親の会の事務局長をしていた成田廣邦さんが自宅で面倒を見てくれることになった。空いた時間はアルバイトをと近くの渡邊商会にアルバイト先も見つけてくれた。教室としても特別に指導は週四日、時間帯もアルバイト前の一時間目とか、仕事の終わった後、四時からに設定をした。二学期半ばから

は週五日、一日に二回の指導の日も設定し、一日も早い回復を願った。

一年間必死に頑張り、高校卒業という年齢から構音に関係する口蓋筋等も固まってきて、小学生が訓練するのと比べ相当つらかったと思うが、必死の努力が実を結び、翌年三月にはことばは見事に改善され卒業した。帰郷後はバス会社に就職し、会社では事務とバス乗り場の案内アナウンス担当をし、きれいになった「ことば」を活かして元気に仕事に励んでいるとのことであった。

N子さんは隣の大船渡市から、中学三年生の時に来室した。最初はお父さんの車で週二回の通級であったが、高校入学と共に意を決し、高校に一年間の休学届を出しひとり釜石に居を移し、臨時工をしながらの教室通級であった。十五歳で見知らぬ土地での一年間はどんなにか辛いことがあったことだろうか。「工場で働いて帰ると、ことばの教室の宿題の『うがい』も、『風船吹き』もできない程疲れた。気が付くとこたつで寝ていることも多かった…つらかった」と、文集「ばっけ」に寄せている。一年で見事にことばの学習を終え、大船渡へ帰り高校に復学した。

平泉のK君は、母親と共に市内に部屋を借り一年間教室へ通った。大変な努力家で機能訓練も人一倍頑張った。ことばの教室を退級し平泉に帰ってからは、秋になると、教室にもち米を送ってくれた。教室では二学期の終わりに、このもち米で餅つき大会をし、また教室卒業式の祝いの赤飯にすることが恒例の行事となっていた。

卒業式に赤飯の贈り物

釜石・大渡小の「ことばの教室」

お陰でむすこも元気

三年続けて 平泉の菅原さん夫婦

K子さん四年生は、市内の小学校の児童であった。バスと列車を乗り継ぎ、朝七時半に家を出て一時間の指導を受けて自宅に着くのは、午後の三時過ぎになるとのことだった。伝手を頼って親戚筋の家に一人で下宿しての通級となった。

昭46・3・13（岩手日報）

口蓋裂の手術は小学校入学前に済ませたが、ことばの指導を受けるべく親子で仙台、東京、千葉とことばの教室を訪ね歩いたそうであった。しかし、どこも入級児がいっぱいで、ことばの教室への入級ができずに四年生を迎えようとしていたその年に、奇しくも釜石市に「ことばの教室」が開設されたのであった。

本人の並々ならぬ努力で、入級から六ケ月後の十一月には素晴らしい発音を得て退級できた。

この「指導前」と「指導後」の録音は、その後のことばの教室開設運動に大きな力を発揮した。

（K子さん母娘の文は別掲です）

三年生のR子さんは、和賀郡湯田町左草からの来室であった。一生懸命なお母さんであった。R子さん親子が教室に初めて来たのは「ことばの教室」開級式当日であった。お母さんがR子さんの手を引いて、大島直教育長さんへ直接、「ぜひ入級をさせてください」とお願いをしていた。既に入級児童は決まっていたのであったが、この熱意に押されて一学期途中からの入級であった。遠く湯田町左草からでしたので、親の会の方々が相談に乗り釜石支部長の熊谷安三さんがR子さんを下宿させることになった。

熊谷さんのところは三人兄妹で、「子どもが四人になったと思えばいい」のだと面倒を見てくれた。口蓋の手術が完全でなかったので、ことばの学習の途中で東京医科歯科大学で最先端の口腔内装具「スピーチエイド」を装着した。県内もとより東北でも初のことであった。大学病院は装着希望者が多く、直ぐの装着は大変であったが遠い親戚筋で東京オリンピックの日本招致演説で名を馳せた、平沢和重氏（NHK解説者）の縁があったと聞いた。お母さんの一途な想いが平沢さんを動かしたのだろうと推察される。

早くオシャベリがしたい

湯田の言語障害に悩む女の子

〝幼いうちだすぐ直る〟

善意に守られ釜石で勉強

昭42・7・19　岩手日報
「律子さん母娘と熊谷さん夫妻」

このように、周囲の支援と理解によって、家を離れてことばの指導を受けることのできた子どもたち。一方、家庭の事情やその他で、適切な時期に適切な指導を受けることが出来ずに諦めた多くの子どもたちもいた。この子どもたちに少しでも指導を受けやすい環境をつくること、指導の場「ことばの教室」を県内各地に、より多く設けることが親の会活動の原点となった。

初代会長　落合新作氏

人

県言語障害児を持つ親の会会長

落合新作氏

昭四三年八月十四日（岩手日報）

昭四四年右から
成田事務局長、落合会長、松田教務、吉田校長、成田妙子さん、落合ハルさん、菅原教頭

資料編・その二

言語障害児を救おう

県内に高まる機運

大渡小（釜石）ことばの教室に見る

一夫婦の努力実る

乗越え難苦り　三年前、手をつなぐ

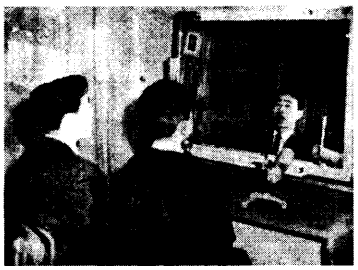
「絶望的な愛」
児の口蓋裂

来年盛岡にも設置決定

まだ十分でない教室数

同病の親に呼びかけて

各地から希望者訪れる



昭和43・8・20（岩手日報）「ことばの教室」

十六　〔設置運動〜県南、沿岸南〕

教室設置運動県南・沿岸南部へ

69-10

〜一関・千厩・陸前高田・大船渡〜

県親の会では、昭和四十三年初の県大会開催以降は県教育委員会と連携を深め、「ことばの教室」開設候補地を県内八か所程度とする方向を確認していた。

沿岸中部釜石市は既に開設済み、県都盛岡市は四十四年開設が確定していた。そこで、県央部地区は花巻市か北上市、県南部は一関市、県北部は福岡町、沿岸南部は陸前高田市か大船渡市、沿岸中部宮古市、そして沿岸北部は久慈市とした。県親の会は、これを基本としてことばの教室設置運動を開始した。

先ず、四十四年十月、花巻、北上、水沢市への運動を開始、次いで十一月には一関市、千厩町、陸前高田市、大船渡市の各教育委員会に教室設置を働きかけた。

県親の会成田廣邦事務局長と私が釜石から出かけ、それぞれの地区親の会から役員など一、二名が同行するのが通例であった。親の会が出来ていない地区とか、親の方が不在の場合もあり、二人だけでの訪問となることもあった。

花巻、北上市は隣接しているので、どちらか一方だけにでも教室開設が出来ることを願っていた。同じように陸前高田市、大船渡市についても、どちらかの市にとの願いであった。水沢市では、保健所の課長さんが、成田さんの奥様と知り合いだったこともあり、開設運動を側面から応援していただき、県南部は他の地区より一歩先んじていた。いろいろな伝手を頼って、地域の教育委員会にこの教育の理解を深めてもらうように働き掛けていただいた。一関市では、教育長さんが以前ＮＨＫ名古屋放送局長をされていたこともあり、「ことばの教室」についての理解が早かった。しかし、一般的には「ことばの教室」の存在どころか名前さえ知られていなかった。

訪問先の教育委員会では、成田さんが「ことばのことで悩んでいる親子がいること、解決するには『ことばの教室』が必要なこと」を話した。しかし、今までに無い新しい「特殊学級・ことばの教室」はなかなか理解されにくく、そんな時私がことばの教室の指導の

成果として、口蓋裂児Kさんの指導前と指導後の発音を録音したテープを聞いて頂いた。聞き比べれば違いは明らかで、テープを聞くと瞬時に関心を示してくれた。しかし、このテープを聞いてもらうまでが大変でもあった。

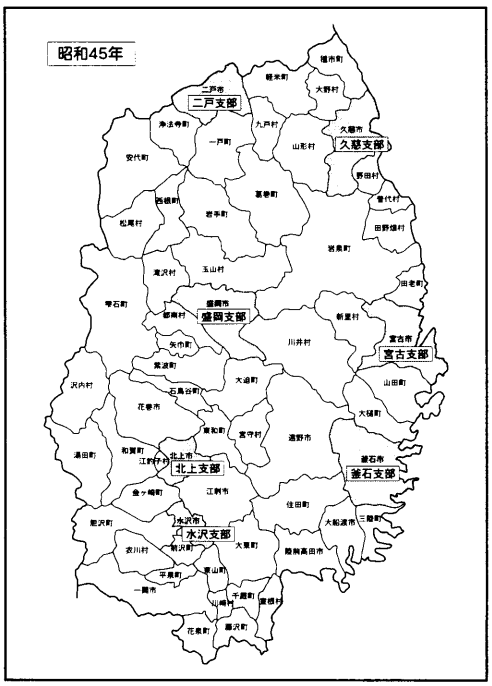
千厩町は一関市と陸前高田市の間にあり、道すがらの訪問であったが、運よく教育長さんに会うことが出来た。成田さんの話しと私のテープに強く感動した教育長さんは「小学校の改築予定があるので、そこにことばの教室を加えることは可能である」と話しが進み「町」への教室設置としては早い段階（昭和四十八年）で、千厩小学校に「ことばの教室」の開設をみた。

沿岸南部は、教室開設候補地として当初は大船渡市を考え、重点地として運動をしていたが、運動の途中立ち寄った陸前高田市教育委員会は「隣の市に教室ができるのに、当市にないのは…」と、大船渡市の教室が開設された翌年には、陸前高田市にも教室が開設されるという嬉しい結果となった。

こうした運動の成果は、昭和四十五年水沢市（姉体小学校）に、四十六年北上市（黒沢尻東小学校）、花巻市（湯口小学校）に、四十七年には大船渡市（盛小学校）、四十八年には一関市（山目小学校）、千厩町（千厩小学校）、陸前高田市（気仙小学校）に、それぞれ教室が開級されていった。

昭和四十五年には沿岸中部地区宮古市（藤原小学校）、沿岸北部地区久慈市（小久慈小学校）に開設された。また昭和四十七年度には県北地区福岡町（石切所小学校）に開設された。

運動の展開と比例するように「ことばの教室」への行政関係者の理解が進み、教室が開設されていった。



昭和45年・親の会支部設置状況

十七　事始め〔言語障害教育研究会〕

岩手県言語障害教育研究会発足

70-7

～七教室・十一名でスタート～

昭和四十五年七月十八日、盛岡市立桜城小学校において「岩手県言語障害教育研究会」が発足した。

この研究会の発足に先立って、昭和四十三年三月、岩手大学教育学部名久井研究室に「岩手県言語障害研究会」が結成されていた。名久井教授と研究生、そして県立盛岡聾学校、岩手医科大学の先生と私など十名程の懇談会的なもので、文献の輪読会や聾学校やことばの教室での事例報告等を行っていた。

昭和四十五年、「ことばの教室」が釜石市に次いで、盛岡市、宮古市、水沢市、久慈市の五市に開設され、教室総数は七教室となった。教職員数は釜石・大渡小学校三、盛岡・桜城小学校二、宮古・愛宕小学校二、久慈・小久慈小学校二、水沢・姉体小学校一名の十名となった。

県教委遠藤寿一郎指導主事の助言により、新たにことばの教室担任を中心とした「岩手県言語障害教育研究会」を結成することになり、六月に準備会を持ち、会則、会費、役員等について話し合い、事務局は桜城小学校、会長は同校の佐川浩校長先生をお願いすることとした。

七月十八日、初めての総会を桜城小学校で開催し、「岩手県言語障害教育研究会」が正式に発足した。会員は教室担任者等と会長の十一名での発足となった。副会長は担任からと私がお引き受けし、事務局長を桜城小学校清水端誠先生にお願いした。

その年の十一月十四日、桜城小学校において第一回研究会を開いた。次いで翌年、四十六年一月二十九～三十日には大渡小学校において第二回目の研究会を開いた。とにかくこれまでにない全く新しい教育であったから、お互いに情報を持ち寄り、意見を交換し、よりよい指導、教室経営を模索し合った。

この第二回目の研究会には、釜石市教育委員会に共催となっていただき、高橋多郎指導主事に開会行事でのご挨拶をお願いし、研究会でもご助言をいただいた。また、会場校大渡小学校吉田干二校長にも挨拶を頂く

とともに研究会にもご参加いただいた。以後の地区持ち回り研究会からも、開催地教育委員会に共催となっていただくことが通例となった。なおこの研究会には、釜石市教育委員会より昼食時にカレーライスを提供いただいた。（オブザーバー・橋本耳鼻咽喉科委員長、小久慈小担任二名は欠席）。

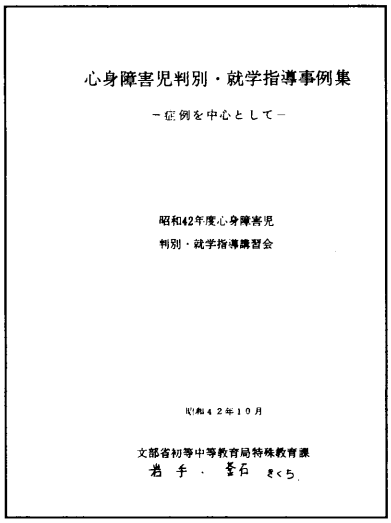
この年二回開催という方向は、それから当分の間続いた。年度初めは盛岡市を会場に桜城小学校で開催し、もう一回は「ことばの教室」が新設された地区での開催を原則とした。設置校の校長先生やその地域の教育委員会など関係者の方々にも参加して頂くことで、ことばの教育への理解が広まること、深まることを願った。また一月には研究発表大会を盛岡市で開催した。

昭和四十六年度は、新研究テーマ（発達関係）を設定したため、年四回もの県研究会を開いている。昭和四十七年度には、ブロック制（県北、県南、沿岸）を設け、地域毎の研究活動を主軸とした。更に五十年度からは、難聴学級複数校開設に対応し、会の名称を「岩手県難聴言語障害教育研究会」とし、また、教室設置校の増加に対応して、五ブロック（中央、県南、県北、沿岸南、沿岸北）と班別研究（難聴班）体制を敷いた。県全体の研究会は年一回、研究発表会だけとした。

その後、五十六年度からは新しく担任となった先生方対象の「セミナー」（後の「研修会」）を夏休みを利用して開催し、会員相互の研修体制を確立した。

平成二十七年度・第五十七回研究大会は、研究会発足四十五周年であった。分科会は、第一分科会「経営分科会」をはじめ八分科会、参加者一六七名（内、校長先生二十三名）を数えた。参加者数は研究会結成以来最多の人数であり、研究会が現在も会員のニーズに確かに応えている証しであると確信した。

（結成四十五年目で、大会開催が五十七回というのは、当初は年に複数回開催の時期があったからである。）


心身障害児判別・就学指導事例集

－症例を中心として－

昭和42年度心身障害児
判別・就学指導講習会

昭和４２年１０月

文部省初等中等教育局特殊教育課
岩手・釜石 きくち

昭42年・文部省主催担当者講習会

十八　〔皇太子殿下行啓〕

皇太子殿下・ことばの教室ご訪問

70-9

～岩手国体と皇太子殿下行啓～

昭和四十五年九月七日、釜石市で開会した夏の岩手国体水泳競技会開会式にご列席のなされた皇太子殿下と美智子妃殿下が、釜石市立大渡小学校ことばの教室を視察なされました。

一か月前には、千田正岩手県知事以下関係者による校内の下見がありました。校門間の巾が狭くお車が入れるかどうかの検討から始まって、汲取り式のトイレの完全汲取りの指摘や廊下の床板が傷んでいるのでその対処など校内施設等について種々の改善点が指摘されていたようでした。ことばの教室に関しては特段の指摘、指導もなく、授業内容についても事前に釜石市教育委員会と検討した内容の通りでとのことで誠に簡単なものでした。

当日両殿下は、予定通り九時過ぎに校庭に整列されていた児童の後ろにお車でお着きになりました。千田知事の先導で本校児童、市内各校校長、町内会長さん等が整列している前へお立ちになられ、児童の代表等にお言葉をお掛けになられました。

その後、玄関で参列者に会釈をなされ、急遽用意された赤い絨毯の敷かれた廊下を通られて南校舎二階のことばの教室にお入りになられました。最初に、佐々木三夫釜石市教育長が「ことばの教室」の施設の概要や指導内容等をご説明申し上げました。その後、二つの指導室と機能訓練の様子をご覧になられました。

私は、各教室へのご案内をいたしました。第一指導室「難聴児の指導」の久保四男先生、第二指導室「幼児（口蓋裂）の指導」の前川好子先生の授業内容をご説明申し上げ、ご質問にお応え致しました。皇太子殿下は、それぞれの指導について専門的なご質問をなされ、言語障害・難聴児教育について事前に相当な情報を得てのご訪問なのだと推察されました。

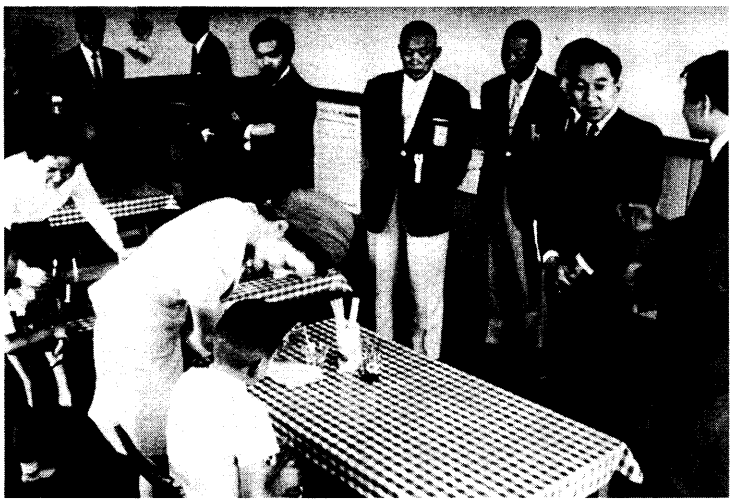
機能訓練室では、藤村ヤス先生の指導の下での五名の子どもたちのピンポン吹き、ビーチボール、ローソク吹きやウガイ等の機能訓練をご覧いただきました。美智子妃殿下は、子どもが吹いたピンポン玉を拾い上

げて、子どもにたちに励ましのお言葉をお掛けになっていらっしゃいました。殿下は、ここでも機能訓練一つ一つのねらいをご質問なされるなど深く関心を寄せていただきました。視察予定時間は、「三十四分間」という分刻みのものでしたが、予定を大幅に超えられ、九時四十五分過ぎにご訪問を終えられました。

この皇太子殿下、同妃殿下の「ことばの教室」ご訪問の様子は新聞、テレビで大きく報道され、「ことばの教室」が県内の多くの方々に知られるようになりました。

児童にお声を掛けられる　美智子妃殿下

その後、親の会成田事務局長と教室設置運動で各地の教育委員会や関係者を訪問すると、「ことばの教室」と言うだけで、ご訪問が話題となり教室への理解も深まり、設置運動がスムーズに進むようになりました。



皇太子殿下・同妃殿下の行啓

《機能訓練室にて》

右から・（菊池）

・皇太子殿下・佐々木教育長・県議会議長

・千田知事・三笠宮殿下・吉田干二校長

・藤村ヤス先生・美智子妃殿下・（児童）

十九　事始め〔組織的研究の展開〕

「言語発達評定尺度」への取組み

71-4

～言語発達遅滞へのアプローチ～

昭和四十五年に発足した研究会での課題は、「言語障害児の定義」「ことばの教室の在り方」「学校内におけることばの教室の位置づけ」などであった。この年は主として「言語障害の定義」と「教室運営上の諸問題」を研究題とし、教室の校内での位置付けや指導対象児について「研究会」として一定の方向を確認した。

この頃の「ことばの教室」の指導対象児は、全国的に「発音の異常、声の異常、吃音、言語発達の遅れ、口蓋裂、脳性マヒ、難聴」の七つであった。中でも指導で悩んでいたのが「言語発達遅滞児の指導」であった。

研究会発足二年目の四十六年度から、この「言語発達遅滞児の指導」に取り組むこととした。一期目の四十六～四十七年度は、研究テーマを「言語発達評定尺度に関する研究」とした。先ず「健常児の言語発達」を学ぶことがその第一歩と考えた。研究紀要第二号（四十七年九月発刊）「言語発達の評定尺度に関する研究」では、研究目標を『言語発達について、具体的な研究を通して治療教育の実践に利用価値の高い評定尺度を作成する。そして、その作業を通じて研修の深化と啓蒙を図る』と記している。

最初に、お茶の水女子大学（田口恒夫教授）版の「言語発達質問紙」を基に、岩手県内幼児（ゼロ歳から六歳頃まで）の言語発達の実態調査をした。この実態調査を基に、「言語発達質問紙岩手版」を作成、更に検証を続け「改訂版」を経て研究紀要第二号と共に「言語発達質問紙第三版」が刊行された。

「発達質問紙は、A「言語発達の基礎項目（百二十五項目）」、B「聴力及び言語理解項目（七十項目）」。C「音声及び言語表現項目（九十九項目）」の三つに分かれている。その項目をチェックして、幼児の言語発達を身体の基礎的発育、聴力、言語理解力、そして言語表現から検査できるものである。

二期目、四十八～五十年度は「言語発達遅滞児の指導・実践」に取り組み、都合五年間をこの言語発達に

関する研究となった。最終的には、昭和五十一年三月発行の研究紀要第三号「言語発達遅滞児の指導はどうあればよいか」に実践記録としてまとめられた。

また、これらの調査・研究をより効率的、組織的に行うため、四十七年度から県内を三ブロック（県北、県南、沿岸）に分け、ブロック研究会を組織した。ブロック研究会は、発足当初は年七、八回も行われ教室経営、実践指導、研究の交流などに大きな役割を果たした。

そして、五十一年度からは、新たに「吃音児の指導」へのアプローチが始まった。

研究紀要第2号
昭和47年9月

言語発達の評定尺度に関する研究

岩手県言語障害教育研究会

昭47・9　研究紀要第2号

言語能力発達質問紙

岩手試案第3版

昭47・9　発達質問紙と三つの項目

A　言語発達の基礎をなすと思われる行動

月	番号	分類	行動項目	答
0・1	1	I	物、顔をじっと見つめる。	
	2	P	例に倣ってもらいたいかのように泣くことがある。離れると泣く、	
	3	M	口のあたりに軽くふれると、くちびるを閉じてすぼめる。	
0・2	4	P	あやすと顔をみて笑う。	
	5	M	乳を飲ませようとしても、舌で乳首を押し出すことがある。	
	6	M	スプーンで飲ませようとこぼすが、半分位は飲める。	
0・3	7	P	母を見わけることができる。（母に対してはその他の人間に対するのと異なった反応をする。）	

B　聴力および言語理解に関する項目

月	番号	分類	行動項目	答
0・1	1	S	大きな音、思い掛けない音でピクッとする。	
0・2	2	S	音のした方に首をまわす。	
0・3	3	S V	母の声を聞きわける。	

C　音声および言語表現力に関する項目

月	番号	分類	行動項目
0・1	1	V	お乳を飲んだ後やおむつを替えた後など、機嫌の良いとき「クークー」とか「アー」とかいろいろな声を出す。(泣き声でない発声をする
0・2	2	V	話しかけると声を出すことがふえる。
0・3	3	V	「クックー」と声をあげて笑う。
	4	V	人の顔をじっと見て声を出し「ッックーン、ックーン」などとお話をする。

二十　事始め〔小学校・難聴学級〕

小学校「きこえの教室」開級

72-4

～釜石市立大渡小学校～

昭和四十七年四月、釜石市立大渡小学校に難聴学級が開級した。入級児童七名、担任は久保四男先生であった。

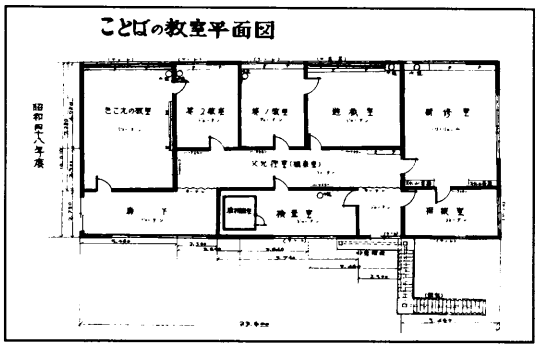
昭和四十四年四月、聴覚に重度の障がいをもつF君が大渡小学校一年生に入学した。F君は、岩手県立盛岡聾学校幼稚部を卒業し、小学校への入学を機に釜石に帰り大渡小学校に入学した。通常学級で学習しながら、毎日決められた時間に「ことばの教室」に校内通級をした。

入学当初は、通常学級への適応指導が急務であった。担当の久保先生は授業の合間を縫っては、F君の学級へ足を運び、担任の佐々木先生と連携を深めながらF君の通常学級適応のサポートを図った。また、週に数回はことばの教室での指導も行った。

二年生になり、ことばの教室では発音指導を主に、聴能訓練なども行い、次第に指導の幅を広げ通級時間も増やしていった。しかし、重度の聴覚障害のF君への対応としては、充分な対応とは言えなかった。

三年生になり、通常学級での適応も望ましいものとなり、「ことばの教室」での指導として、聴能訓練、発音指導そして教科の補充指導も試みた。他の児童の指導時間との関わりもあり、週五日、一日一～二時間の対応が精一杯であった。教室、学校として「難聴学級」設置について、親の会や市教育委員会とも、この対応を話し合った。

昭和四十六年十一月、釜石市親の会として、栗沢勇治市長と市教育委員会委員長へ「難聴学級開設」の陳情書を提出し、その早急な対応を書面で訴えた。更に翌年二月には、早期の「難聴学級」開設の請願書を議



昭48年改築した教室

会に提出した。

昭和四十七年四月急遽、難聴学級設置が認められた。陳情からわずか半年「きこえの教室」が正式に開設をみた。緊急の事ゆえ、当年度は集団補聴器など八十二万円の備品費のみの予算計上であった。しかし、市では四十九年度までに「難聴教室の整備」を計画し、「ことば、きこえの教室」の全面改築を予定し、その改造費、備品整備費として五百万円の予算を計上する案が示された。

同四十七年四月、勝田敬二先生が難聴児教育研修のため東北大学教育学部へ県から派遣され、翌年四十八年度から難聴学級担任となった。

このように、陳情書を提出した翌年に学級開設となったのは、陳情書の提出後更に、請願書を提出したことが大きかったと考えられるが、その背景には「言語・難聴児教育」が広く社会に認識されはじめたこと、県親の会、支部親の会の「教室開設運動」が社会的に認められた証しでもあったと思う。

「きこえの教室」開く

釜石の大渡小

〝普通の勉強できる〟

難聴の子ら、希望を胸に

昭47・4・14（岩手日報）

箸（はし）をもて舌をおさえてくりかえす
あせる心に唇は動かず

〝かあさん〟ただひとことの言（こと）の葉（は）が
始めて出し吾子の笑顔に

言（こと）の葉（は）を暗き運命と生れ出る
今や吾子にも朝日ぞ輝く

飯岡　マサ
（山田町）

二十一　事始め〔親の会・地方大会〕

県親の会第五回大会・宮古大会

72-7

～地方大会原型、実行委方式確立～

岩手県言語障害児をもつ親の会は、第一回県大会を昭和四十三年に盛岡市の岩手県教育会館を会場に開催した。その後第二回、第三回大会も盛岡市を会場に開催したが、ことばの教室が県内各地に設置されるようになったことを受け、第四回大会は盛岡を離れ花巻市を会場に開催した。この大会会場は花巻市であったが、大会運営は従来通り県本部が行った。

第五回大会（参加者百三十五名）は、昭和四十七年七月二十三日、宮古市中央公民館を会場に開催された。この大会は、地元主体で大会実行委員会が設けられ、実行委員会が主体となって大会の準備は勿論のこと当日の運営全体も行った。現在行われている地方大会の原型がこの宮古大会から始まった記念すべき大会であった。

大会の中心となったのは、宮古支部会長芳賀禧久先生と教室担任の若松三郎先生であった。二人のタッグは見事で、二人を中心に支部の親たちが一致団結して県大会を成功に導いた。実行委員会を設けての運営方式は、その後第六回水沢大会、第七回二戸大会へと受け継がれ、現在の地方で開催される県親の会大会の原型となっている。また、会場正面に掲示された「岩手県言語障害児をもつ親の会大会」の文字看板（ベニヤ板の切抜文字板）も、芳賀先生の手作りによるもので、その後各地での県大会へと引き継がれて長く使われていった。

親の会パンフレット

この大会が行われたのは、宮古市に教室が開設されてわずか三年目の事であった。実行委員会が組織され、それが見事に機能したのは、若松先生が以前に知的障がい児学級の担任の経験があり、そこで築かれた巾広い人脈によるところが大であると推察された。また、芳賀先生、近江二郎さん（宮古若竹会）等、宮古地域の親たちが障害の枠を越えて広く結束して大会運営に

当ったことが、大会成功の大きなカギであったと考えられる。

宮古支部はこの大会を開いたことにより、会員一人一人の会への所属感が高まり、他支部との交流会の開催、親子宿泊研修会の実施など支部活動が活発化していった。この隣接町村を含めた広域的親の会活動は、支部での新たな親の会活動のあり方を示唆し、それまで県本部だけで行っていた「ことばの教室」開設運動等も、支部が主体となって積極的に展開をしていく契機となった。宮古支部の活動は県内の最先端を行くものであった。

第六回大会（昭和四十八年）は佐々木仁県副会長の地元、水沢市で開催された。ことばの教室担任四年目の千葉忠範先生、そしてその後担任に加わった鈴木秀悦両先生の新しい感覚が発揮された大会となった。それまでの大会になかった「学習会方式」が導入された。開会式、総会に続いて三つの分科会が設けられ、親の提案者による話題提供を基に協議を進める方式であった。この学習会方式は、その後の県親の会大会の基本型となり、長く受け継がれている。

水沢大会事務局（鈴木秀悦・千葉忠範）

第七回大会（昭和四十九年）は、ことばの教室を設置して三年目、嶋野清三副会長の地元県北二戸市で開催された。ことばの教室を開設して実質二年の四月二十八日の開催は、嶋野清三副会長と教室担当阿部洋三先生、支部会員の強い結束があったから出来た大会であった。この大会は、開催地が県全体から見ると北に片寄った、県内各地からの参加者にとって距離的にハンディのあるものであった。そして、このことに伴うハプニングがあった。宮古支部の方々が乗ったバスが途中で故障し、百五十キロ離れた会場に到着したのは大会終了間際という、残念なこともあった。

毎年の県大会を地方持ち回りで開催したのは、昭和五十九年の江刺大会までで、昭和六十年の二十周年記念盛岡大会以降は、本部直轄の「盛岡大会」と地方支部管轄の県大会を隔年で開催している。

第６回水沢大会記念品

二十二　事始め〔言語調査研修〕

ことばの実態調査会

73-8

～会員研修と教室開設を～

岩手県言語障害教育研究会では、県親の会、全国親の会の支援を得て、言語障害児の実態調査と会員の言語検査研修会を兼ね、これまで県内数カ所で「言語障害児実態調査会」を行っている。この調査会が契機となって「ことばの教室」の開設に直接結びついた町もあれば、数年後の教室開設の契機となったこともあった。

その一　湯田町・沢内村全校調査

県言難研究会と県親の会とが、ことばの教室開設を願って地域の実態調査を行ったことは意外と知られていない。費用等は全国親の会の補助金を活用した。

教室開設運動を展開する中で、入級対象となる子どもたちがどのくらいいるのか、具体的な数字を出すことは、行政へ「ことばの教室開設」の働きかけをする際に大きな力を発揮するというのは自明の理である。

最初の試みは、昭和四十八年の和賀郡湯田町と沢内村における町村内全校児童の言語検査であった。実態調査は、研究会としては検査実習による会員の言語検査力向上を図ることと合わせ、会員の親睦を深める絶好の機会ともなった。

この言語検査は、昭和四十八年八月三十一日、九月一日の両日行われた。研究会会員二十名、ほぼ全員が参加した。両町村内の小・中学校全校の悉皆調査である。小学生、一一四七名、中学生七五二名を検査した。全校検査がはじめての先生もいたが、その場合は経験者の先生とペアになって言語検査を行うことで、言語検査技術の伝達にもなった。夜は湯本温泉の万代旅館に宿泊し大いに懇親を深めた。

両町村にことばの教室が開設されるのは、この調査から六年後、「沢内村立猿橋小学校」に開設。更に「湯田町立川尻小学校」には、調査から十五年も経過した昭和六十三年に開設をみた。この言語調査会が、すぐに教室開設という結果を出せたとは言いがたいが、大きなうねりを起こしたことは事実であろう。

その二　葛巻町調査（葛巻小、江刈小）

同じ四十八年の十一月十六日に、葛巻町の二つの小学校において、同様の検査会を行った。こちらは財政的なこともあり、「湯田町・沢内村検査会」より規模は小さいものとなり、葛巻小学校と江刈小学校の二校だけであったが同じ手法で検査した。先生方の参加者も限定的（十人ほど）となった。

調査結果の資料を基にして、県親の会では葛巻町教育委員会へことばの教室設置を働きかけたが、教室が開設されたのは昭和五十七年（校舎新築時）であった。この調査も直接的に機能したとは言い難いものであった。

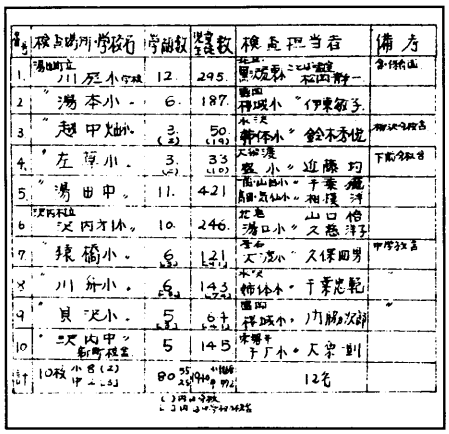
その三　岩泉町全校調査

昭和四十九年に入り、岩泉町教育委員会と共催で同様な検査会を行った。十一月十四日から十六日にかけ、岩泉町内の旅館に二泊しての本格的な調査であった。調査に参加した先生方は二十名ほどであった。各学校での検査を学級名簿に記入して持ち寄り、お互いの検査結果を検討し、検査の適性を吟味した。また、全体の集計結果は、教育委員会と県親の会に具体的に報告した。

この検査結果を受け、岩泉町教育委員会は、翌五十年に、杉本妙子先生を宮城教育大学へ言語障害児教育研修に派遣した。検査から二年後、昭和五十一年四月にことばの教室が開設された。担任は杉本妙子、佐藤敏子先生であった。

調査が教室開設に結びついたことは願ってもないことであった。また、有名な「牛乳風呂」を体験したことが後々までの語り草となっている。

これらの調査会を通じて、会員の言語検査力アップはもとより教室間の「ことばの検査基準」の平準化や指導法、教室運営等について深い話し合いもできた。大変意義のある調査会であった。



番号	検査場所・学校名	学級数	児童数	検査担当者	備考
1.	湯田町立 川尻小学校	12	295	花巻 豊沢東小 こしい敏雄 和田敏子	多・特殊学級
2	〃 湯本小	6	187	盛岡 稗貫小 〃 伊東敏子	
3	〃 赤平小	3 (3)	50 (19)	本荘 鮎川小 〃 鈴木香代	秋田県教育委員
4.	〃 左草小	3 (2)	33 (10)	大船渡 盛小 〃 近藤均	下閉伊教育
5.	〃 湯田中	11.	421	高山高小 〃 千葉麗 高田・高砂小 〃 相澤清	
6	沢内村立 沢内第小	10.	246.	花巻 湯口小 〃 山口信 久慈清子	
7	〃 琴畑小	6 (3)	121 (31)	宮古 大沢小 〃 久保田男	中学教員
8	〃 川舟小	6 (2)	143 (22)	本荘 鮎川小 〃 千葉忠範	〃
9	〃 貝沢小	5 (3)	67 (37)	盛岡 稗貫小 〃 内藤次郎	
10	〃 沢内中 新町校舎	5	145	宮城 千厩小 〃 大宗則	
計	10校 小8(2) 中2(3)	80 (25)	1410 (97)	12名	

（）内は学級
（）内は特学級

湯田町・沢内村調査校と担当者

75-7

親の会十周年記念大会と第一回親子合宿研修会

岩手県言語障害児をもつ親の会「十周年記念大会」は、昭和五十年七月二十七日、釜石市嬉石町の釜石勤労福祉センターで開催された。この十周年大会と同時進行のかたちで、岩手県親の会「第一回親子合宿研修会」も開催された。十周年記念大会と県親の会として初めての親子合宿研修会の二つ同時の開催であった。

その一　岩手県言語障害児をもつ親の会　十周年記念大会

昭和四十年七月に県親の会が結成されて十年目の昭和五十年七月二十七日「岩手県言語障害児をもつ親の会十周年記念大会」（大会実行委員長野田武義県議会議員）が釜石市勤労福祉センターで開催された。

浜川才治郎釜石市長、木村利見県福祉部長、堀川英俊県教育委員会指導課課長、全国親の会小林咲子会長、平岡利美事務局長など多数のご来賓をお迎えして盛大に行われた。記念講演には、横浜国立大学加藤安雄教授（前文部省教科調査官・元宮城県教委指導主事）を迎えた。県内参加者は十五支部、二百五十名を超える大会となった。

大会は、九時半から開会行事。挨拶、祝辞に続いて、この十年の親の会の教室設置運動を記録した八ミリ映画「十年のあゆみ」が上映された。その後「これからの障害児教育」と題し、加藤先生

記念大会全体日程表

9：00～9：30	11：00	11：10	12：30	13：00	14：00	14：10			15：10
受付	記念行事	休憩	記念講演	昼食（郷土芸能・虎舞）	総会	会場移動	分科会		
	・開会のことば ・実行委員長挨拶 ・会長挨拶 ・市長挨拶 ・祝辞 ・「10年のあゆみ」		「これからの障害児教育」 横浜国立大学 教授　加藤安雄		・開会のことば ・会長挨拶 ・経過報告 ・議事 ・役員選出 ・その他 ・閉会のことば		特設	育成医療、身障手帳、補聴器交付手続き……	（3F）休養室
							第1	親の会はどうあればよいか	（2F）大会議室
							第2	親はどうあればよいか	（3F）大集会室
							第3	教室の経営はどうあればよいか	（3F）小会議室

の記念講演で午前の部が終わった。昼食後「親の会総会」、午後二時から四分科会に分かれて学習会を行い、終了は午後三時十分というものであった。

この記念大会及び親子合宿キャンプを行うにあたって、第一に県下十三の全支部からの会員参加と県内のことばの教室担当者が何らかの形で大会運営に係るように企画した。また第二に、県教育委員会、開催地釜石市、大槌町両教育行政関係者に運営委員、助言者として関わって頂くこととした。大会に何等かの形で主体的に関わることにより、親の会やことばの教室への理解がより深まることを期待した。県難言研究会の先生方、それに大渡小学校の先生方にも、運営委員、司会者等として主体的に関わっていただいた。

地域の若い方々にも、ことばの教室、親の会活動への関心を深めていただきたいと大会運営への協力をお願いし、キャンプでの子供たちへのアシストとして釜石市ボーイスカウト隊、釜石ガールスカウト隊員のご協力をいただいた

（下表参照）

10周年記念大会・学習会　運　営　表　　7月27日（日）9：00～14：10				
第1分科会（親の会）	運営委員 ・小野信一（釜石市会議議員） ・菅原千代子（遠野市立東禅寺小　校長）	助言者 ・大島　直（釜石市元教育長） ・小林　保（岩手県児童婦人課）	司会者 田澤保晃（小久慈小ことば）	話題提供者 ・佐々木源蔵（胆江支部） ・永洞佳範（宮古支部）
第2分科会（親の会）	運営委員 ・山本裕二郎（釜石議会議員） ・多田成男（釜石・小川小校長）	助言者 ・安久津成雄（釜石市教育委員長） ・落合新作（前岩手県親の会会長）	司会者 在原　弘（宮古支部）	話題提供者 ・嶋野清蔵（二戸支部）
第3分科会（ことばの教室）	運営委員 ・朝倉　馨（釜石唐丹中校長） ・佐藤裕一（和賀笠松小教頭）	助言者 ・堀川英俊（岩手県教委指導課長） ・沢田昌蔵（釜石市教委教育課長）	司会者 ・清水端　誠（盛岡市桜城小ことば） ・佐々木仁也（大船渡市盛小ことば）	話題提供者 ・菊池　満（黒沢尻東小ことば） ・及川桂司（千厩小ことば）
特別分会（福祉・補聴器・障害手帳他）	運営委員 ・菊池義三（大槌教委　指導主事）	相談員 ・中平静男（釜石福祉事務所） ・山口一治（釜石福祉事務所） ・高橋梅暖（釜石保健所）		

その二　第三回東北地区並びに第一回岩手県親子合宿研修会

本県初の親子合宿研修会（キャンプ）は、十周年記念大会と並行する形で、同日（二十七日）午前十一時受付、午後二時開会式という日程であった。

この二泊三日のキャンプは、全国からの補助事業で、その規程に「一日目は午前中から、三日目の午後までの日程を組む」という縛りがあり、そのため一日目、午前十一時受付という日程を組まざるをえなかった。

また「東北ブロック親子キャンプ」も兼ねていたので、キャンプ参加者は、東北五県から親子二組、教室担任一名、合せて十五名の参加が必要であった。本県関係は、県教委佐藤静夫指導主事はじめ、釜石市教委など来賓七名、県下各支部親子二十組に加えて釜石支部親子五組参加という大規模なものとなった。

スタッフは、県内の教室の先生方三十名、釜石支部親の会二十名で約五十名。ボランティアは釜石市ボーイスカウト十五名、アトラクション釜石虎舞一行十余名等々、総勢百五十名を超えていた。

岩手県親の会第１回親子合宿研修会　講師・助言者・司会者・担当者一覧　（昭和50年７月27日～29日）

27日（日）		28日（月）		29日（火）	
親	子	親	子	親	子
		ラジオ体操　釜石大渡小　野村一雄先生		ラジオ体操　釜石大渡小　野村一雄先生	
		朝の集い ・釜石市 藤本留五郎教育長	野外観察 ・宮古市 藤原小若松三郎先生	朝の集い ・大槌町 大槌小佐々木三男校長	野外観察 ・宮古市 藤原小若松三郎先生
		朝　食		朝　食	
		学習会Ⅰ講師 ・岩手県教委 佐藤静夫指導主事 ・司会 福島第四小野木孝先生	ファミリータイム ・盛岡市 桜城小清水端誠先生	座談会 ・司会 青森県親の会 福井忠男さん	感想文 ・盛岡市 桜城小清水端誠先生
○受　付	受　付 ・ファミリー組分け ・ファミリー担当者 （県内　教室担当）	学習会Ⅰ講師 ・岩手医科大学 本間利美助教授 ・司会 山形第一小　今田裕先生	集団あそび ・宮古市 藤原小若松三郎先生		
○　開　会　行　事		親子レクリエーション ・大船渡市立盛小学校　佐々木仁也先生		○　閉　会　行　事	
夕　食		夕　食			
夕べの集い ・釜石市 佐々木忠男校長	ファミリータイム ・釜石市 大渡小 松田義一郎先生	学習会Ⅲ　講師 東京都心身障害者福祉センター 石戸谷英一先生 ・司会　青森市立長島小学校中村雄一先生	入浴 （ファミリー単位）		
座談会 ・講師　岩手県福祉部児童婦人課大橋瑠璃子課長 ・釜石市福祉事務所松阪高光課長 ・司会　青森県親　福井忠男	ファミリー単位 就　寝	学習会Ⅳ「補聴器」 ・講師　リオン補聴器本吉晨哉氏 ・司会 宮城県本吉小学校 横山浩一先生	ファミリー単位 就　寝		ボランティア団体 ・釜石ボーイスカウト ・釜石　若い土の会

会場は、釜石市鵜住居町、根浜海岸近くの新築間もない釜石東中学校の校舎全面をお借りした。来賓は根浜海岸宝来館に宿泊頂いたが、東北各県の先生方をはじめ参加者は教室での宿泊となった。教室に貸布団を敷き、上は毛布一枚。毛布は支部親の会会員の持ち寄り、枕は手作り、正に手作りのキャンプであった。

学習会は、助言者に県教委、岩手医大の先生や東京、仙台などからその道のエキスパートに依頼し、司会者には、東北各県のことばの先生方をお願いした。スタッフは、釜石の行政関係、大渡小学校の先生方はじめ県難言役員の先生方に依頼した。子供たちのグループ指導者は県内ことばの先生方に、補助員として釜石のボーイスカウト、ガールスカウトの方々をお願いした。

十周年大会同様、行政関係者、社会に親の悩みを直接聴いていただける機会と捉えての企画であった。

教室設置校大渡小学校の先生方には、全面的な協力をお願いし、学校全体で大会・キャンプを支えていただいた。ことばの教室久保四男、勝田敬二、梶原幸子の各先生は各部署責任者、運営本部機能の中枢に据えた。親の会は、成田会長が総指揮、実戦部隊は早坂釜石支部長はじめ支部の親の会全員だった。

県親の会としても、釜石支部としても初めての十周年という記念行事、親子キャンの二つの行事を同時に行ったところに大きな無理があった。十周年大会では、参加者の大幅増により弁当不足、学習会進行の手違い。二十キロも離れた根浜海岸の親子キャンプ会場。連絡、調整不足等など多くのミスを生んだ。それでも何とか大きな事故もなく「十周年大会」と「親子キャンプ」を終えることが出来たのは、運営に関係した一人一人が前向きに、主体的に関わって頂いたからだ思う。私は、総括者がどうあるべきかを学んだ大会であった。この大会運営で得た教訓はその後の行事・事業運営に大きく活かすことが出来た。

わけても四年後、昭和五十四年「第八回全難言協・岩手大会」でこの教訓が生かされた。総括責任者であった私は、企画・計画段階から各部長に任せ、総括は何をやるべきかを常に考えて運営、推進に当たった。

当日も、総括である私は、開会式を県民会館二階の機器調整室に居て、開会式は全て清水端事務局長に任せた。開会行事は滞りなく進んだ。

二十四　事始め〔ことばの教室公開〕

ことばの教室公開研究会

75-10

～教室研究の取り組み～

昭和五十年十月二十七日、大渡小学校ことばの教室は、県内初の「ことばの教室・公開研究会」を開催した。研究主題は「母学級との連携はどうあればよいか」であった。

ことばの教室では昭和四十二年度の教室発足以来、第一期、四十二年～四十三年度は「ことばの教室の在り方」と「各障害別の指導法に関する研究」。第二期、四十五～四十七年度は「難聴児指導」と「幼児期の言語指導」研究。そして、第三期四十八年度からは釜石市教育委員会の研究指定を受け「母学級との連携はどうあればよいか」を市内の幼稚園、小学校と共同研究として行った。

研究に当たり「母学級」は、一般的な特殊学級（知的障害児）で言うところの「親学級」とは、その意味、字義が異なり「ことばの教室に通う児童の通常の生活、学習を行う在籍学級」を意味するものと捉えた。一般的ないわゆる「親学級」は、通常は特殊学級で学習をする児童が行事や特定の教科の学習時に一時的、時限的に出向く学級を指す。それに対して、ことばの教室に通級して来る児童の在籍学級を「母学級」（ぼがっきゅう）とした。

ことばの教室に通級する児童がその生活、特に言語生活のほとんどを過ごすのは家庭そして母学級である。ことばの教室での言語指導は、児童の言語生活全体から見るとほんの数パーセントであり、家庭、学校（母学級）での支援、補強、補充が必要不可欠である。そこに「母学級との連携」の重要性がある。特に、吃音や言語発達の遅れ、構音障害などの場合は日常生活への適応のカギは母学級、家庭での接し方が重要であると考えた。

研究は、県教委佐藤静夫、釜石市教委宮城敬吾指導主事の指導をいただきながら推進した。また、白山小学校百済サキ子先生など市内十四小学校、釜石市立第一幼稚園佐藤峰子先生など三幼稚園の母学級担任二十四名との共同研究であった。

ことばの教室の公開研究会は県内では初めての試みであり、来賓、助言者十名、県内ことばの教室担任十九、県外一名、それに共同研究者の市内幼稚園、小学校、中学校関係者二十五名、総勢五十五名の参加を得て盛会裏に開催できた。

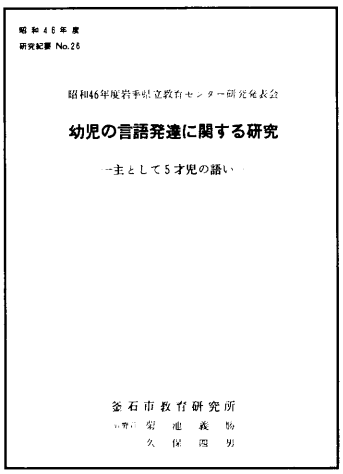
なお、前述の教室での研究は、県難言研究会のテーマに沿った研究をとは別に、教室独自での研究の取り組みであった。

ことばの教室の公開研究
母学級との提携強化を
障害児教育に大きな成果

昭50・10・28（岩手東海）

特に、四十八年六月から取り組んだ「幼児期の言語指導・三歳児教室」は、宮古児童相談所菊池敏夫先生、福祉事務所中村英司先生そして教室担当者五名がチームを組んで「三歳児教室」として取り組んだものである。対象児は、五歳児のF君（教室では映画館の新聞広告切り取って並べている）。四歳児のTちゃん（水道の蛇口から出る水の感触を楽しんで帰る）。三歳児のKちゃん（表出言語なし、語り掛けにも反応なし）など四名であった。週二回の試行期間を経て、最後は週一回、九十分の教室となった。F君は普通小学校入学、Tちゃんは二年後養護学校へ入学、Kちゃんは重度心身障害児施設へ入所した。

また「幼児の言語発達に関する研究～主として五歳児の語彙～」は、昭和四十六年、四十七年度の岩手県立教育センターの研究発表会において発表をし、ご指導をいただいた。また、これらの幼児の言語指導への取組は四十七年度から釜石市保健衛生課が実施した「釜石市・四歳児検診」へと繋がっていった。現在もこの四歳児検診は続けられている。また、この検診が契機となり「幼児ことばの教室」の開設へと発展した。


昭和46年度
研究紀要 No.26

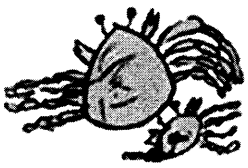
昭和46年度岩手県立教育センター研究発表会

幼児の言語発達に関する研究

―主として5才児の語い―

釜石市教育研究所
菊池義勝
久保隆男

昭47・2　教育センター・発表資料


「ママと遊ぼう」より

二十五　事始め〔中学校難聴学級〕

中学校「きこえの教室」開級

76-4

～盛岡市立下橋中学校～

昭和五十一年四月、盛岡市立下橋中学校に岩手県初の「中学校難聴学級（きこえの教室）」が開設された。小学校の難聴学級は、四十七年に釜石市で開設され、盛岡市にも四十九年四月、桜城小学校に開設されていた。そして、その卒業生たちは同じ学区の下橋中学校に進学していたが、しかし中学校には「難聴学級」はなかった。

盛岡市親の会では、桜城小学校に難聴学級が開かれた時点から、市教育委員会に「中学校難聴学級」の開設を働きかけていたが実現されていなかった。中学校に進学した生徒たちには、桜城小学校きこえの教室担任門脇次郎先生考案の「補聴補助装置」一台が該当教室に設置され授業時補助的に使用されていた。

昭和五十年盛岡市で、「文部省指定特殊教育推進地区」発表大会が行われた。そこで「小学校に設置されていて、進学先中学校に難聴学級が未設置であることは課題である」とも指摘された。これらを受け、盛岡市教育委員会は中学校難聴学級の開設を急いだ。

昭和五十一年四月、一年生一名、二年生二名、三年生三名の六名で下橋中学校難聴学級が正式に設置され、私が担任として釜石から赴任した。しかし、教室改造に関する予算未定。改造予定図面も無し。校内運営組織上の位置づけ未定。わずかに聴力測定器購入予算三十万円があった。生徒たちは、「拠り所」となる教室が出来ると胸を膨らませたが「きこえの教室」は未改造の「普通教室」が充てられているだけだった。

六月に入り、工藤是勝教務主任と青森市、仙台市、東京都等先進校視察をした。今後、校内で「きこえの教室」の推進役となる教務主任に、先進校の「きこえの教室」の施設・設備そして校内組織上の位置付けなどの実情を見てもらいたかった。

教務主任の報告を聞いて、石川喜一校長もこれまでの認識が変わったと後にお聞きした。校務組織上の所属、きこえの教室の位置づけ、指導内容、きこえの教室での補充指導教科確定、親学級との連携等々、工藤

教務主任サイドで検討され成案をみた。一方、教室改造、備品等々は、先進校を参考に私が粗図面を書いた。学校長は「つくるからには、しっかりとした教室」にと、市教育委員会と折衝を重ね、最終的には教室改造費、諸備品費は六百万円を超えた。当初予算三十万円の二十倍となった。

きこえの教室での指導内容は以下の「教科指導」「聴能・発音指導」及び「生活」の三分野とした。

「教科（促進）指導」は、親学級での通常の学習で、特に遅れがちな英語、数学の二教科をきこえの教室での補充指導教科とし、指導には親学級で教科担当をしている同じ先生にきこえの教室でも指導いただくこととした。

「個人FM補聴器」生徒は、きこえの教室での教科指導は補充的なもので、ほとんどの時間は親学級で授業を受ける。その際に、先生の声ができるだけ明瞭に耳に届くように「FM補聴器」を用意した。市備品で個人貸与の形を取った。充電器を事務室に置き、きこえの生徒が朝夕事務室に出入りし、先生方と挨拶を交わすように配慮した。きこえの生徒のことが、先生方の話題になることを狙った。また、FM補聴器の耐用年数は三年なので、卒業時には市の備品廃棄手続きをした。そのまま高校で使い続けた生徒もいた。

「聴能・発音指導」は、週一時間の個別指導とし、発音訓練や聞き取りの訓練を主とし、きこえの教室担任が指導にあたった。

「生活」の時間はHR的なもので一年から三年生まで六名同じ時間とした。この「生活」の時間は、他の設置校では見られない下橋中独自のものである。「自己を知り、これからの生き方を考える」時間、進路学習の時間とも考えた。話す機会をできるだけ避けようとする生徒等の貴重な「話し合いの場」でもあった。

生徒たちは、意外にも自分の聴力を知らなかった。自分で聴力測定器を操作し「自己聴力測定」を行った。これにより自分の聴力を客観的・体験的に把握させることができ、後の進路決定時に大きな力を発揮した。

自己を知る…時には友達の目から、時には客観的事象から…、それを基盤に生き方を考える時間であった。この三分野は、中学校難聴学級の必須であると考える。

二十六　事始め〔全国大会開催〕

79-9

第八回全国難聴言語障害教育研究協議会・岩手大会開催

～全国大会と博報賞・奨励賞～

第八回全国難聴言語障害教育研究協議会・岩手大会は、昭和五十四年九月二十日～二十二日まで、岩手県民会館と岩手県自治会館を会場に開催された。

大会一日目は、県民会館で開会式を行い、引き続き「岩手の歩み～県難言教育十年」と題し、スライドで岩手の難言教育、教室設置運動の展開を紹介した。それまでの全国大会には無い試みとして好評を博した。

一日目の午後、二日目の午前中は、第一分科会「難聴言語障害児学級設置校の学校運営上の諸問題」から第八分科会「構音障害・口蓋裂児の指導」まで八つの分科会で構成し、二日間、協議時間五時間を確保して分科会協議を深めたことも岩手大会の特徴であった。

各分科会とも、発表者は全国、東北、岩手各一名の三名。助言者には、全国と岩手からの二名体制。司会者二名は東北各県と岩手各一名体制として、東北地区の一体感醸成を工夫した。

二日目、大会記念講演会は「人間について」と題して、作家水上勉先生の講演をいただいた。研究会会員以外の市内の特殊学級担任や一般市民の方々へも招待券を配るなど広く案内をしたこともあり、会場の県民会館中ホール（定員六百名）は、ほぼ満席に近かった。

この大会を正式に受諾したのは、昭和五十二年十二月八日の第六回全難言東京大会の理事会であった。

全難言協事務局からのアプローチは学芸大学で研修をした縁で、宮古・藤原小学校ことばの教室田﨑豊義先生を通じて五十年頃に一度あった。研究会では、「東北初開催の全国大会を本県で受けることは時期尚早である」「内部の研究体制確立優先」などの意見も出されたが、結局「全国大会開催は、本会の研究推進にも大きな刺激」になるだろうとのことで承引する

全国大会記念講演　　—ご招待券—

講師　水　上　　勉

人間について

とき／昭和54年9月21日(金)　午後1時30分～

ところ／岩手県民会館・中ホール（盛岡市内丸）

第8回全国公立学校難聴言語障害教育研究協議会岩手大会実行委員会

こととなった。

大会開催をするに当たって、大きな課題は二つあった。一つは、本研究会に「設置学校長部会・校長班」が組織されていなかったこと、二つ目は大会運営・研究推進に関わる経費の問題であった。

一、経営部会・校長班の組織化

全国大会では、第一分科会として「設置校の経営上の諸問題（設置学校長）分科会」が開かれていたが、本研究会では、校長先生方が正式の会員となっておらず、設置校長部会がなかった。研究会会長として事務局設置校桜城小学校の校長先生をお願いしていたが、他の教室設置校の校長方は正式会員ではなかった。

季村正輔会長、清水端事務局長と相談の上、県教育委員会の佐藤静夫指導主事の意見をお聞きし、これを機に校長先生方も会員とし「校長班」を設けることとした。五十二年度の研究大会から「校長部会」を設け、設置校の校長先生方の参加をお願いすることとした。最初の校長部会の参加者が少なくては以後の運営、とりわけ二年後に迫った全国大会の設置校長部会の成否にかかわると、佐藤先生と相談の上、校長部会の発表者、司会者、地区事務局校の校長先生方へは、県教育委員会から旅費を出していただくことができた。これが功を奏し、初の校長部会を開いた五十三年度研究大会には、設置校のほとんどの校長先生方に出席いただいた。そして全国大会開催についても協議いただき、研究会に「校長班」を結成することが出来た。

五十四年の全国大会「第一分科会・設置学校長分科会」では、黒沢尻東小及川慶一校長先生が提言者となった。全国大会は、第一分科会「設置校長部会」から第八「口蓋裂部会」まで、八つの分科会で無事開催できた。

二、大会運営経費の捻出

研究大会当日の運営に要する経費に関しては、県教育委員会や開催地の盛岡市からの支援、そして主催者の全難言協からの負担金等で賄える見通しはあった。問題は大会開催に向けて、本研究会としての研修の強化や大会運営に関する諸会議の旅費等であった。この大会に向けて何年か前から会として計画的に積み立てることも無く、その意味でも全く急な開催であった。特にも四国四県に匹敵する広大な本県では、大会推進に関わる会議や係打合せ会等の旅費が大きな問題であっ

た。又、開催に絡んで派生する弁当代や「レセプション」関係費など、公費では賄いきれない部分があった。

事務局内部での話し合いで、大会運営経費は会員に負担を掛けないこととしていたが、大会へ向けての全体研究会や班毎打合せ会の増加など年会費値上げをせざるを得なかった。しかし、来賓等のレセプションに要する経費については事務局サイドで工夫することとなった。結局、大会要項への広告掲載（協賛、十一社）と県民会館一階展示室に、難言教育関係教材、補聴器関係の展示スペースを設けて展示協力金を頂いた。またレセプション関係費用は、馬場勝彦氏の協力で市内の観光案内地図を作成してそこに店名を掲載し、協力金をいただいて賄った。

三　大会運営の工夫

全国大会に向けての研究会組織の改編は、校長班の設置のみであった。ただ、大会実行委員会については幅広く組織し、実行委員に県教育委員会佐藤静夫、石川智康、菅野正年各指導主事、盛岡市教育委員会菅野達雄指導主事、それに県特研事務局長松尾弘一、市特研事務局長吉田曠の両先生に入っていただいた。特に県、市特殊教育研究会の事務局長に実行委員会に入っていただいたことにより、当日の参加者の増加、特に水上勉氏の講演会参加者増に繋がったと考えられる。

実行委員会の各部構成は、総務部若松三郎、菊池。運営部山口悟他十六名。編集部菊池満他十一名。調査部田中豊他十三名。研究部は、佐々木仁也他全会員とし、校長班、難聴班の二班と、県北、県央、県南、沿岸南、沿岸北の五ブロック構成であった。

〔大会参加数について〕

北海道から鹿児島まで三百六十三名、沖縄からの参加申し込みはなかった。岩手を除く東北五県からは百五名の参加申し込みがあったが、比較的近い北海道は九名と少なかった。（当時北海道研究会が全難言協に未加入という事情があったからと推察される）

岩手県関係は、九十一名（会員以外は、山目中学校四名、幼稚園関係七名、聾学校、養護学校など十七名）であった。

東北・北海道以外の都府県からは、百五十八名（金沢大五名、国立研究所四名が目立った）であった。

尚、当日の分科会参加者は、八分会、四百二十九名

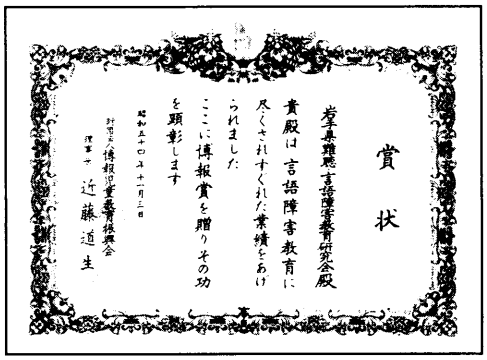
（分科会役員除き）で、参加申込者数を大きく上回って、前年に行われた第七回山口大会を超える規模の大会となった。秋の大会であったので、東北の「錦秋」に誘われて参加者が多くなったのかもしれない。

文部大臣奨励賞と博報賞受賞

大会終了から二か月後、昭和五十四年十一月、本研究会に「文部大臣奨励賞」（文部省）並びに「博報賞」（博報児童教育振興会）の受賞の知らせが届いた。全国大会の開催並びに本会のこの教育へのこれまでの取組みが評価されたものと会員はもとより、行政、親の会等関係者と共に喜びを分かち合った。

受賞式には、清水端事務局長と私（副会長）が出席した。

第八回全国大会要項



賞状

岩手県難聴言語障害教育研究会殿
貴殿は言語障害教育に尽くされすぐれた業績をあげられました
ここに博報賞を贈りその功を顕彰します
昭和五十四年十一月三日
財団法人博報児童教育振興会
理事長　近藤道生

昭54. 11. 3　博報賞

賞状

岩手県難聴言語障害教育研究会
あなたがたは財団法人博報児童教育振興会主催第十回博報賞言語障害教育の部において優秀として推薦されましたよって奨励のためにこれを賞します
昭和五十四年十一月十五日
文部省初等中等教育局長
内閣総理大臣　大平正芳

昭54. 11. 15　文部大臣　奨励賞

二十七　事始め〔セミナー〕

セミナー（研修会）開催

～米国バン・ライパー氏招聘？～

81-7

昭和五十二、三年頃、研究会若手の鈴木秀悦、田﨑豊義、千葉忠範、久保四男等々の先生方が集まり「言語障害児教育とは…、これからの研究は…」と機会を設けては語り合っていた。これは温泉に一泊して、レポートを持ち寄り、日頃の実践を交流しつつ懇親を深めようとの会であった。

そんな中、金ヶ崎温泉会場のときに「翻訳物はどうもわからん」「直接本人から直に話しを聞きたい。そうだ、アイオワ大学に行こう！」と話は急展開。「いや、出かけるよりバン・ライパーを岩手に呼ぼう！」と盛り上がったのである。そんなこんなの有志による大きな夢のある「自由な語りの会」であった。

昭和五十四年に全難言協岩手大会を開催を終え、それまで年二回開催の研究会は、一月の「研究発表大会」一回だけになっていた。そこで、若手の意向も踏まえ五十六年から「セミナー」を開催することになった。

以前は、東北大、宮城県研修センター、仙台市立通町小学校、東京学芸大、横浜国大、金沢大、宮城教育大学等々で一年間の難言教育の研修を受けてことばの教室の担当者となっていたが、急速な教室の開設増で、研修を受けることなく担任をやらざるを得ないケースも見られるようになってきたという背景もあった。セミナーは「初任者を対象とした研修会」として発足した。担任経験の長い先生方が講師となり「ことばの教室経営」、「ことばの指導法」「日本語の成り立ち」「機器の扱い方」「親との接し方」など等を経験を踏まえて伝えていく講習会的なものであった。

第一回目のセミナーは、昭和五十六年八月七～八日、盛岡市立桜城小学校を会場に、講義三コマ、演習二コマと「模範授業」と協議会「セミナーの今後の在り方について」等を行っている。名称は「言語障害教育セミナー」である。

第１回セミナー風景

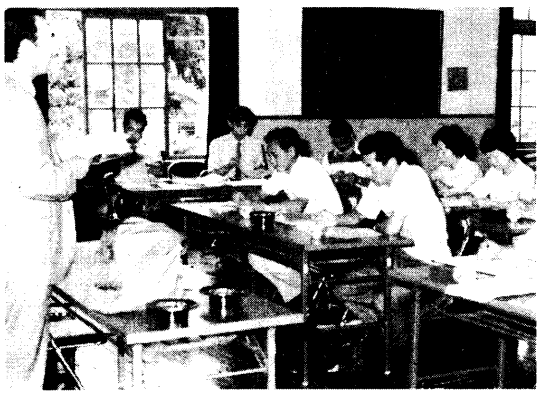
内容と講師は、「きこえとことばの教室運営の在り方」菊池義勝（下橋中）、「日本語の音声体系・発音表記と構音指導実習」田沢保晃（小久慈小）、「構音検査の実際（実技）」若松三郎（桜城小）、松岡静一（沢内村猿橋小）、千葉忠範（宮古市愛宕小）の三班に分けての実技指導。そして「構音指導の授業の実際（ＶＴＲによる）と協議」清水端誠（桜城小）、それに全体協議会「セミナーの運営と内容」司会は阿部洋三（二戸市石切所小）であった。

初回の会場は桜城小学校であったが、その後第二回目は宮古市立愛宕小学校、第三回水沢市立姉体小学校、第四回鶯宿温泉鶯山荘、第五回花巻市花巻南温泉水松園と続き、第六回からは受講生も多くなったので盛岡市中央公民館で開催。十一講座、一協議となった。講座の種類によっては、初任者と経験四年以上の者を区分けしての講議とした。内容もセミナーというよりは、「研修、研究会」的なものへと変化していった。第七回は盛岡市総合福祉センターで開催。講座もＡ～Ｉまで八講座、一協議会となっている。

開催時期は、夏期休業中（第一回から七回まで）を原則としていたが、昭和六十三年からは、夏休み前の一学期後半に行われ、名称も「セミナー」から「研修会」へと変更された。理由は前述の内容的な変化もあり、また「セミナー」では、学校から出張の形での参加がしにくいとの会員の要望に沿って名称を変更したのであった。

本来的には、ことばの担任になったばかりの未研修の先生方の研修の場として位置づけられ、内容も講義や演習時間が多かったが、近年は、初任者対象というよりは、高度な研修内容になっているように思われる。現在も、五月の「研修会」、一月の「研究大会」は岩手県難聴言語障がい教育研究会の二大事業として継続されている。

昭56・8・7～8



日本語の音声体系と構音法について講義する　田澤保晃先生

二十八　事始め〔幼児ことばの教室〕

「幼児ことばの教室」開級

82-4

～盛岡、北上、釜石三市に～

昭和五十七年四月、釜石市立大渡小学校、北上市立黒沢尻東小学校、盛岡市立桜城小学校に期せずして三市同時に「幼児ことば」の教室が開設された。

幼児期におけることばの指導は、早くからその必要性が叫ばれていたが、「幼児ことばの教室」はなかなか実現しなかった。担当者の養成や担当者の給料等が各市町村の負担となることも大きな課題であった。

県親の会では、昭和五十一年の北上大会から「幼児期のことばの教育」を運動の一つの柱と位置づけ、幼児教室開設運動を展開していた。

「幼児ことばの教室」がなかったからといって、幼児に対してことばの指導が行われていなかった訳ではなかった。県下のほとんどの「ことばの教室」では、地域の教育委員会との暗黙の了解で、「幼児」を「小学校のことばの教室」で指導をしていた。小学生を対象とした教室ではあったが、幼児もそのうちにことばの教室通級対象児となることや早期指導が効果的であったからで、小学生の通級指導時間の合間に臨時的な扱いで幼児を通級させていた。

しかし、通級希望者の増加に伴って、行政にことばの教室の増級を要請すると、「小学校のことばの教室は、小学生が対象であって幼児は対象外である。対象外の幼児を入れていて、増級の要請は如何なものか…」というような指摘もあって、「幼児は小学校に設置されていることばの教室の対象外である」。市町村によっては「小学校のことばの教室で幼児を扱うことは不可である」と指導されるようになった。

このような、原則論からくる幼児の通級禁止の市町村や小学生の教室入級希望者が多くなると、幼児が入級出来ない教室が多くなっていった。また、釜石市では「四歳児検診」として「ことばの検査」を実施し、ことばの指導が必要な子どもの発見が早く幼児のことばの指導の受け入れ先の整備が急がれていた。

盛岡市の場合は、昭和五十六年の国際障害者年に、盛岡市を会場として開催された東北特殊教育研究大会

や県親の会大会などで、幼児期のことばの指導の必要性が叫ばれたことも契機となった。

いずれにしても、それまでの原則から外れて例外的に、小学校ことばの教室で受け入れていた「幼児のことばの指導」の課題が明らかになったことで「幼児ことばの教室」設置運動は一挙に加速し、三つの市に同時に開設されるという画期的な前進を見たのであった。

現在、県下のほとんどの市に「幼児ことばの教室」が設置されている現状をみると、幼児期のことばの指導を、小学校の「ことばの教室」の空き時間に指導するなどと曖昧にしていた時期を経て、課題を明確にしたことにより幼児ことばの教室があるべき方向に進んでいったと考える。

三市の「幼児ことばの教室」担当者の身分はいずれも市職員であった。盛岡市（森田巧先生）は「教育研究所」所属の障害児教育専門相談員、北上市（高橋良子先生）は市の「福祉部」所属の期限付き職員（元ことばの教室担任）、釜石市（田川ツヤ、照井ミヨ子先生）は「教育委員会学校教育課」所属の幼稚園教諭であった。また、いずれの幼児教室も小学校のことばの教室に併設の形であった。

それぞれの市が工夫を凝らしての「幼児ことばの教室」の開設であった。小学校の「ことばの教室」への併設ということは、施設、教具、教材の共有という事だけではなく、教育相談や子どもの指導上での交流、協同化、そして指導の継続性などプラスの面が大きいと考えられる。

今後の県難言研究会では、「幼児教室のあるべき方向性」についても研究を深めて欲しいものである。

また、町段階での開設も保護者からの要望は多いと推察され、親の会の喫緊の課題でもあると考える。

「きこえとことば」
幼児教室スタート
早期訓練、大きな一歩
釜石・大渡小 親の願い実を結ぶ

昭57. 4. 13（岩手日報）

二十九　事始め〔幼児期の言語研修会〕

幼児期の言語研修会

84-4

～幼稚園の先生方の研修講座～

昭和五十九年八月七日、盛岡会館（現サンセール）において「第一回幼稚園・保育園の先生方のための研修講座・幼児期の言語教育」が開催された。

昭和五十七年には、釜石、盛岡、北上市に「幼児ことばの教室」が開設されるなど、早期発見・早期指導の観点から幼児期のことばの指導の必要性が高まっていた。しかし、多くの市町村に「幼児ことばの教室」が開設される見通しは薄く、現場で戸惑う幼稚園・保育園の先生方の要望に沿う形で、「岩手県言語障害児をもつ親の会」主催で研修講座を始めることとなった。

当初、「岩手県難聴言語障害教育研究会」主催で行うこととし、研究会事務局内部で話し合いが重ねられた。しかし、検討を重ねるにつれて研究会が主催団体となり研究会の事業として行うには、会の性格、会則などの面から、そして講座開設に関わる経費の問題等々、研究会が事業主体となるには無理があった。そこで事業主体を県親の会とし、運営を全面的に研究会事務局で行うこととした。

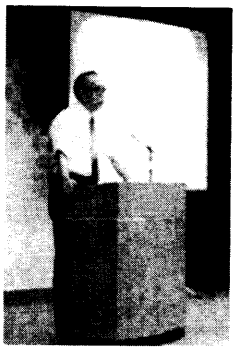
研修講座案内は、親の会の活動の一環として各支部親の会が、支部内の幼稚園・保育園などへ開催案内書を持参し「幼児期のことばの指導」の必要を訴えると共に研修会への参加を働き掛けた。

第一回目の講座は、メイン講師に岩手大学教育学部教授石川桂司先生を迎え「幼児期における問題行動の見方ととらえ方」と題した講演をお願いした。そして、講座二「ことばの発達とつまずき」を清水端誠（研究会事務局長・桜城小学校ことばの教室）先生が、講座三「幼児のことばの障害の発見とその指導」を私（研究会副会長・下橋中学校きこえの教室）が担当した。

受付、資料配布、会計事務等は親の会成田会長をはじめ県親の会役員の方々が受け持った。どの位の先生方が参加してくれるか不安でいっぱいであったが、当日は会場の定員に近い八十四名に参加いただいた。赤字を出すことなく第一回目の講座が開会できた。

以後も、メイン講師は外部からの講師をお願いし、

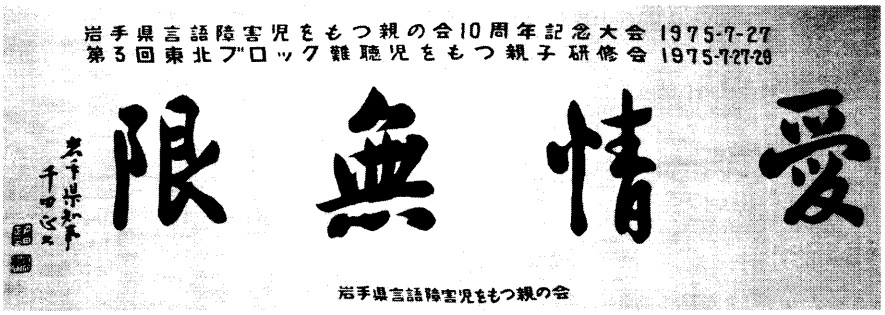
各講座講師は研究会会員からの原則を貫いてきた。会員が講師になることで、参加者との質疑応答から学ぶこともあり、講師にとっても有意義なものであった。その後、講座の数を増やし、選択制講座を試みるなどがなされ、現在に至っている。



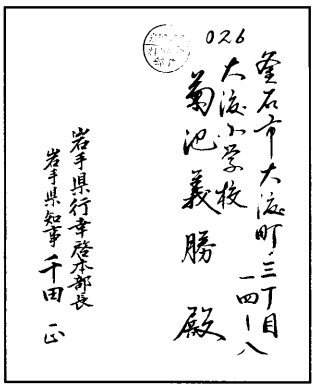
岩手大学・石川教授

会を重ねて、平成二十八年には第三十三回を数えて、開催形態も、親の会主催、研究会事務局運営、講師は、研究会会員、OB会員の原則が貫かれている。ここ数年、八十名を超える参加者があり、幼稚園・保育園の先生方の研修の意欲の高さが伝わってくる。岩手の幼児期のことばの教育に多いに貢献していると捉える。

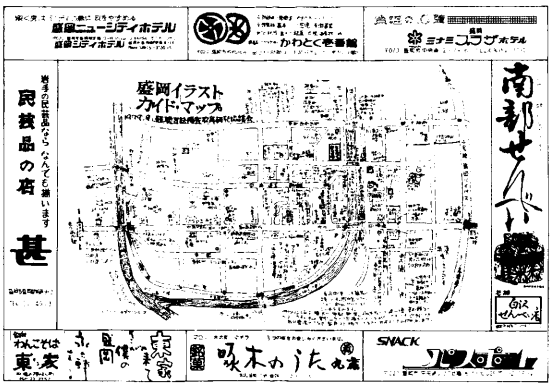
昭和59. 8. 7　第１回研修会



昭50. 7.27～29　10周年大会・親子キャンプ記念品（揮毫は千田正知事）



昭45・11　皇太子行啓の礼状封筒



昭54・９・20～22　第５回全難言岩手大会案内図

三十　事始め〔ことばを語る会〕

99-8

岩手のことばを語る会

～ことばの教室担任ＯＢ会～

平成十一年八月八日、花巻温泉ホテル千秋閣に於いて第一回「いわてのことばをかたる会」が開かれた。開催までの経緯は、この教育に生涯を奉げた、岩手県言語障害児をもつ親の会初代事務局長で第二代会長、そして全国親の会第三代会長でもあった成田廣邦さんが、前年十年九月十一日に逝去されたことがきっかけとなった。成田さんの葬儀に集まったことばの教室担任であった先生方が、旧交を温めるうち「担任ＯＢ会」的なものを作ってはどうかということになり、翌十一年八月の成田さんの一周忌に、標記の語る会をはじめて開いたものである。（発足時は、ひら仮名表記）

ことばの教室（大渡小学校）の初代担任ということで、私が会長を引受け、若松三郎先生（桜城小学校・研究会第二代事務局長）に「語る会」事務局長をお願いした。副会長には、先輩の清水端誠先生（桜城小学校・研究会初代事務局長）と佐々木仁也先生（大船渡市立盛小学校担任）をお願いした。

平成十四年までは、地区持ち回りで毎年開催した。第二回は大船渡市ホテル海楽荘、三回は水沢市金ヶ崎温泉東館、四回は鶯宿温泉鶯山荘、五回は宮古市白浜・海幸園、船をチャーターし本州最東端の「とどヶ崎灯台」まで足を延ばした。その後は、隔年開催を原則に、第十一回を平成二十八年六月に開催し、今に至っている。

また、文集「華鬘草」創刊号を平成十四年七月に発行、現在は第五集（二十四年発行）まで発行している。

平成二十六年五月の総会において、会則改正を行い、これまでの、主として「会員の懇親

平成11・８・８「第１回語る会」花巻・ホテル千秋閣

を旨とする」方針に、「岩手県のことばにニーズをもっている子どもとその親の支援」の一項を加え活動の巾を広げるとともに、会員も教室担任ＯＢだけではなく、現役の先生方や県親の会役員経験者まで巾を広げ、現在（平成二十八年）、七十余名の会員である。

平成二十六年十二月には新方針を受け、気仙地区に於いて、気仙地区語る会会員、現役の先生方、それに県ことばを育む親の会気仙支部と共に、「気仙地区ことばを語る会」を開催した。これからの「気仙地区のことばの教育に関し、地区の言語障がい児教育を振返ると共に、その上に立ってこれからのあり方を考える機会となった。また、県難言研究会の協力を得て「幼児ことばの相談会」も開催できた。

夜は、語る会気仙支部、気仙地区親の会と共に「懇親会」を行い、盛小学校の校長先生、副校長先生にもご参加いただきながら、気仙地区のことばの教室の歩みとこれからの夢を話し合い、和気あいあいの中で会を閉じた。

このような、幅広い活動ができるのは、担任経験者、現担任、親の方々が会員の「語る会」ならではと思い、これからも及ばずながら岩手の「ことばにニーズをもつ子と親たち」そして、「ことばの教育」の発展を後押ししたい。

前述の第十一回総会は、平成二十八年六月十一日、鶯宿温泉ニュー鶯山荘で、県難言研究会外山敏会長、県親の会主濱友子会長を迎え、参加者二十八名で、開催された。この総会において新会長に若松三郎先生が選出された。事務局長は引き続いて津川哲二先生である。平成十一年に発足以来、十七年目の会長交代であった。長すぎた。

新若松三郎会長、津川哲二事務局長のもと、新しい「岩手のことばを語る会」に期待する。

平24. 10. 26日発行

三十一　〔ことばの相談会〕

最後のことばの相談会

～田野畑小学校ことばの教室開設～

2011-6

平成二十四年六月、全国親の会からの補助金を得て「ことばの教育相談会」が田野畑村で開かれた。

平成二十四年、岩手県内全市町村の中で「ことば・きこえ・幼児教室」のいずれも開設されていなかったのは田野畑村のみであった。

昭和四十三年から四十九年にかけての「ことばの教室開設運動」が盛んな頃には、久慈市への教室設置運動で何回も通っていた田野畑村であったが、当時は「村」への教室開設は夢のまた夢であった。

あれから半世紀になろうとすると今、田野畑村に「ことば、きこえ、幼児教室」のどれ一つとしてないことは、県親の会としても大きな課題であった。平成二十三年に、九戸村伊保内小学校に「ことばの教室」が開設されると、教室未設置は田野畑村だけになった。

県親の会は、平成十年代の臼澤弘泰会長時代から、田野畑村教育委員会に「ことばの教室」開設について継続的に、十数回のお願いをしてきた経緯があったが、未だことばの教室の開設をみていなかった。

今回は、全国親の会からの「相談会補助金」によって田野畑村には経費の負担を掛けることなくことばの相談会が可能となった。相談の結果によっては教室開設に向けて、より積極的な働きかけが必要になると考えた。また、翌二十五年度には聴覚に障がいをもつ子どもさんが、田野畑小学校に入学予定でもあった。この為にも教室の開設が必要であるとも考えていた。ここ数年は県親の会主濱事務局長も伝手を頼って何度か教育委員会を訪問し開設を働きかけてもいた。

また、県親の会佐々木会長をはじめ、岡崎副会長等も数度に渡り足を運んでいたが、教育委員会との話し合いは行き詰まっていた。

この相談会を「岩手のことばを語る会」が主体となり進めることになった。まず、相談会開催を教育委員会へどのように働きかけるかを、若松先生と相談し、直接教育長さんと話し合うことが肝要と考えた。幸い、若松先生は教育長さんと旧知の間柄であるとのことで、

その線から押すことにした。若松先生から、石岡教育長に直接電話を入れていただき、直接お会いできる運びとなった。

六月に入り教育長さんにお会いすることができた。県内で唯一ことばの教室が未設置であり、来年度には小学校に聴覚障がいのお子さんが入学すること、その為にも教室開設が必要となること。そして、先ずは「ことばの相談会」開催をしては如何かとお話しをした。教育長さんは「田野畑村は、東日本津波の復旧で手一杯。特別支援学級は、本年二十四年度に開設したばかりであり、また村内六つの小学校を一校に統合という大事業も待っているので新規事業は無理である。施設的に教室を新しく設ける余裕はない」とのことであった。

一時間半程の懇談で「夏休み中に『ことばの相談会』を開くこと、費用については、当方で全面的に負担をするので田野畑村教育委員会の負担は無いこと。事務的な進め方は指導主事と行う」という方向を結論に帰路に着いた。

その後、指導主事と十数回もの連絡を重ね、七月二十六日に相談会開催が決まった。各幼稚園・保育所への案内状原案、相談会表示等一切を準備しメールで送信。当日の相談員についても牧原登（宮古市）、関谷えり子（大槌町）、帷子豊美（岩泉町）先生方の協力依頼も取り付け開催にこぎつけた。

当日、朝九時半から午後三時頃まで行われた相談会には二十余組の親子が来談した。相談結果は「ことばの教室」の入級が必要と思われる子どもさんが十余名にもなった。その晩は田野畑村に泊まり、結果集計、出現率算出、「ことばの教室」入級の適否等を若松先生と深夜まで行い、翌朝には担当指導主事に提出した。この調査結果により教育委員会は教室設置の方向へと舵を切ったようであった。

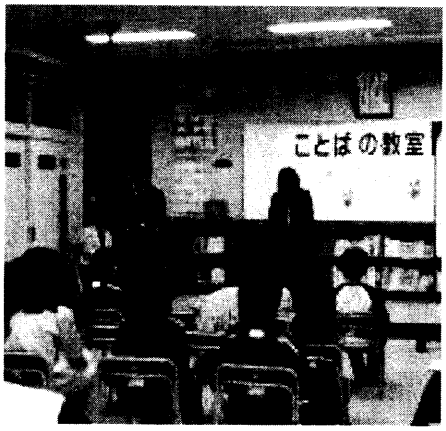
その後、県教育委員会へ出向き、田野畑村で検査を行った経緯と結果の概要を話し、村がことばの教室開設の方向で動き始めたこと、県教育員会として教室開設と先生の配置について特段のご配慮をお願いした。県教育委員会としても県内でただ一カ所、ことばの教室未設置であったことでもあり、検討を約束してくれた。

翌年、平成二十五年五月一日、田野畑村立田野畑小学校「ことばの教室」開級式が行われた。入級生は九名、担当者はことばの教室担当経験の藤村隆先生が、盛岡市から異動してその任に当たられた。

昭和四十二年、釜石市立大渡小学校に初の「ことばの教室」が開設されてから四十六年目、岩手県三十三市町村全てに「ことばの教室」が設置された。

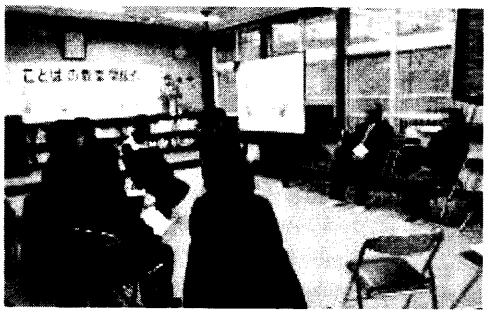
平成二十八年度現在、全国で全市町村に「ことばの教室」が開設されているのは岩手県だけである。

成田廣邦、臼澤弘泰、佐々木信孝の三代の会長と多くの方々の想いが実を結んだ、最後のことばの教室開級であった。



大芦校長挨拶

開級式風景


父母会・親の会結成

あとがき

ことばの教室やことばの教育、親の会の歩みに関しては、これまで親の会周年記念誌「あゆみ」、研究会「三十周年記念誌」に年度毎に整理され詳しく記述されています。また、岩手のことばを語る会文集『華鬘草』にも多くの方々の想いが記されています。

今回の**「折々の記」～岩手のことば　事始め～**は、ことばの教室、研究会、親の会活動などの**「事始め」**について、この教育に関わって五十年、その時、その場に関わらせていただいた者として書き留めてみました。

あれから数十年が経過し諸事業、行事も関係諸兄姉のご努力により、よりスムーズに、よりスマートに、より盛大に、そしてより社会へアピールできるものとなり多くの県民のご理解とご支援を頂いていることに感慨を覚えます。大変うれしいことです。それだけに発足時の願い、ねらい、原点に今一度思い致すことも肝要であることかなとも考えます。

もとより、文を書くことは誰にも負けないほど苦手な自分です。これまでも思い立っても筆が進まずでしたが、傘寿の声を聞き後のないことも自覚し、今風に言えば「スカイツリーから飛び降りた気持ち」で書き留めてみました。出来るだけ古い資料を探し出し、客観的なものにしたいと心掛けました。しかし「想い出は、常に自分に都合よく…甘く～」の格言通り、自己に甘いものとなったことを猛省いたしております。再度書き直す気力も体力も持ち合わせておりません。ご叱正覚悟で印刷物といたしましたので、お読みいただきました皆様のご賢察にご期待申し上げます。

最後になりましたが編集にご協力いただきました「岩手のことばを語る会」役員・事務局の皆様、並びに編集・構成・印刷に多大なるご支援を頂きましたセーコー印刷　瀬川社長様に心より感謝申し上げます。

平成二十八年九月七日

菊池　義勝

表紙画について

表紙の絵は、昭和34年３月「釜石ロータリークラブ表彰」記念に、菊地實校長先生から戴いた色紙です。

「達磨の絵」は「ことばの教室」が新設された学校にその度に新しく画かれ、「岩手県ことばを育む親の会」から贈られていました。（平成５年頃まで続きました）

折々の記〜岩手のことば　事始め〜

発行日　平成二十八年九月七日

発行者　菊池　義勝

盛岡市東松園一―二一―二

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

岩手のことばを語る会

会　長　若松　三郎

事務局長　津川　哲二

盛岡市北松園四―一六―一

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

印刷所　㈲セーコー印刷

盛岡市下の橋二―二三